

1 新しい職場

激しくうねる波が幾重にも打ち寄せる砂浜の上空を、一羽のウミネコが右に左に揺れながら飛んでいた。今にも降り出しそうな、どんよりとした雲の下で、風が唸っていた。砂浜には木片や発泡スチロールの箱が打ち寄せられ、その陰でカラスが何かを漁っていた。魚が腐ったような匂いがした。

巻き上げられた砂粒は陸に向かって突っ走っていた。防風のために植えられた松の木は小さく曲がり、突風に耐えていた。それでも何重にも配列された防風陣は、海から離れるにつれて高く伸びやかになっていった。左方へ目をやると、大きな川が海に流れ込んでいた。川面は波立ち、春から秋にかけて釣り人で賑わう川岸には誰もいない。川は薄茶色に濁っており、かなたの山はすでにうっすらと白かった。

私は海から離れ、林の中に入ってしまった。防風林の内側では、山から下りてきた、あるいは北方から渡ってきた鳥たちがさえずっていた。藪の中からミソサザイの音が響き、低木のまわりをシジュウカラがせわしなく飛び回っていた。さらに高木では、アカゲラがカツカツと小気味のよい音を立てて、幹の中の餌を探していたが、その声はしばしばゴ—という機械音に打ち消されていた。

私がおの会社を訪れたのは十一月の終わりだった。夏から秋にかけて登山、自転車、サーフィン、釣りを楽しんでいたが、そろそろ働かないと、生活できなくなっていた。県の緊急雇用対策事業を請け負った会社が臨時職員を募集していた。産業廃棄物の処理が仕事らしい。ハローワークの説明では、八月から募集していたが、辞めた者がいるので再度募集しているという。松林の中は、この業者にとっては都合がよいだろう。何をしているか人目につきにくく、騒音を出しても苦情は限られる。約束の時間まで少し余裕があったので、私は会社のまわりをぶらついていた。

日給が九千円と高かったので、すぐにこの仕事に応募することを決めた。自宅から車で二十分の距離にあったうえに、叔父の家が近くにあった。雇用されるかどうかは面接しだいらしい。

会社の入り口は広く、ダンプカーや収集運搬車が入りしていた。松林の中の構内には焼却炉と煙突があり、コンベアーの上を廃棄物が流れていた。重機も何台か動いていた。入り口近くに二階建ての建物があり、その一階が受付だった。ほかに、いくつもの作業小屋や格納庫が見えた。

廃棄物処理場―その言葉は私に様々なイメージを思い浮かべさせた。乱暴な従業員、不法な投棄や埋め立て、悪臭とゴミに群がる蠅、残業の多いきつい労働、近所からのクレーム。一言で表現すれば、町の嫌われ者。そういうところで、私は働こうとしていた。

それでも、私は汚い仕事に慣れていた。むしろ綺麗な仕事はしたことがないと言うほうが正しかった。オフィスでパソコンを操作したり、書類を整理したりする仕事は御免だった。体力にも自信があった。好きな登山にしても釣りにしても、体力を消耗するものばかりだった。体をいじめることは、私にはむしろ喜びだった。

当然、危険な目にも逢ってきた。私がニュージールランドの最高峰クック山に単独登頂した翌日に、同じルートで遭難事故が起こり、数名が死亡したことがあった。八甲田山で春スキーをしていて、雪崩に巻き込まれたこともあった。黒部の支流ヘイワナ釣りに行ったときには、川を覆うスノーブリッジを踏み抜いて川に落ちたこともあった。それでも、私は誰の助けも借りずに生きて帰ることができた。

サーフィンをしているときに、溺れたサーファーを助けたことがあった。離岸流に巻き込まれたが、無理に抵抗せずに、沖へ流されながら離岸流を抜け出し、最後には岸まで連れて戻ることができた。友人と南アルプスを登山しているときに、崖の下に落ちて助けを求めた人を見つけたこともあった。私たちは五十メートル下まで降りて、怪我をした人を背負い救出した。

私は受付でハローワークの紹介状と履歴書を見せた。まもなく、総務部長の小村昭雄が現れた。背の低い、真面目そうな男だった。目が小さく、その左右が離れていた。人を威嚇するような雰囲気はまったく持ち合わせていなかった。古そうなジャケットを着用し、革靴を履いていた。私は毎年秋まで遊んでいたので、職歴については自信がなかった。

「小村博さんですか。健康面では問題なさそうですね。では明日から来てください。仕事の内容は毎日ちがうかもしれないので、一階の集合場で確認ください。作業着は自分で用意ください。それから印を毎日もってきて出退時に押してください。決して無理をせずに、事故に注意して勤務してください」

それだけの面接であっさり決まってしまう、私は少し拍子抜けしたが、久しぶりに働くことが決まって安堵した。その後、総務の三沢朝子から、朝は七時半までに来て、八時から十七時まで働くこと、給料は翌月の末日に支払われることなどを説明された。構内では作業員たちが黙々と働いていた。

初めての仕事は、処理場のはずれの荒地で石やゴミを取り除くことだった。何のためにする作業なのかはわからなかった。八月から働いている小林進という人がリーダーで、私と同時に入社した佐川勤が従った。三人ともヘルメットを被り、タオルを首に巻いていた。会社から支給された黄色のヘルメットはよく目立った。

「まあ、ぼちぼち働いたらいいさ。そんなに期待されているわけじゃないからさ」小林が無表情で言った。小林はひよろりとした背の高い男で、私と同世代に見えた。

「でも、会社はこれだけの給料を払うのだから、それに見合った利益がないとやっていけないのでは？」と私は質問した。

「県から俺たちを雇うための補助金が出ているんだよ。だから、それほど利益を出さなくていいんだ。素人に無理に働かれて、事故を起こされたり、機械を壊されたりすることを恐れているみたいだ」

「それなら楽でいいじゃないか。だいたい、石ころなんていくら取っても、きりがない」今度は佐川が言った。佐川は小林とは対照的に小太りで眼鏡をかけており、歩くときに左右に体がぶれた。目が大きなわりに、小さな鼻が顔の右寄りについており、どこことなくびつな顔立ちだった。

鍬やスコップなどの道具は、近くの小屋に置いてあった。取り除いた石は大小二つのグループに分けて、石置き場に積んだ。大きな石は二人で協力して掘り返した。それにしても佐川は力がなく、役に立たなかった。

おそらく、何万年も前には川の流路は定まっておらず、このあたりにも水が流れていたのだろう。その頃に上流から運ばれてきた石が、このあたり一帯を覆っているのだ。その川を堤防で狭め、流路を定めることによって、人々はこの氾濫原に家を構えたり畑を作ったりすることができるようになった。石ころをすべて取り除くのは、しよせん無理なことだった。佐川が言ったことは正しいと思った。

石ころ取りは退屈な仕事だったが、私はこれでお金が貰えるのだ、と思って頑張った。どこから正社員が監視しているかもしれない。正社員が後で仕事のはかどり具合を検査するかもしれない。退職した人がいると聞いていたが、怠けているという理由で首にされ

たのかもしれない、などと考えていた。

昼になって一時間の休憩となった。私たちは駐車場まで戻って昼食を食べることにした。比較的暖かいので、駐車場から少し林の中に入って、早朝に買ってきたコンビニ弁当を草の上で食べた。佐川もついてきた。

「佐川さんは、どうしてここで働くことにしたのですか？」

「どうしてって、ほかに職がなかったんだ。前に勤めていた工場を突然首になったのだが、その理由は知らされなかった。中学生の娘と小学生の息子がいるのだが、嫁は息子を連れて出て行ったきりだ。定職に就きたかったが、なかなか決まらなかった。そんなときに、この仕事を見つけたんだ」

佐川は淡々と話した。作業着が汚れていて、ポケットにはいろいろなものが雑然と詰めこまれていた。「君はまだ若いね。定職を探せばあるんじゃないか？」

「そうでもないですよ。私は一時的な職を転々としているので、何か訳があると思われているようです。だから正職員にはなれないんです。私には嫁も子供もいないし、一年中働こうとは思っていません。暖かい季節には山や川でやりたいことが沢山あるのです」

「そんなもんかねえ。今のうちに貯金しておかないと、将来が大変だよ。年をとると仕事はどんどんなくなるからね」

私は働き蜂のような人生は御免なんだ、と心の中でつぶやいた。貧乏でもやりたいことをしたいと思っていた。商業高校を卒業した後、私は自動車の組み立て工場で働いていたが、単調な生活に厭きて数年で退職した。それからは、スキー場や土木会社で短期だけ働き、春から秋にかけてはアウトドアスポーツを楽しんだ。私の両親は私が七歳のときに離婚し、それ以来父は行方知らずで、母に育てられてきた。その母も五年前に他界し、私にはボロ屋とわずかな畑だけが残された。兄弟はいない。

もうすぐ三十八歳になろうとしていた。若いと言えば若いのだろうが、このところ仕事にありつけることが少なくなっていた。私は畑で野菜をつくり、米は母の弟である叔父の松山善三にもらっていた。そのために、一か月の食費は一万円もあれば十分だった。

石ころ取りはその後三日間続き、簡単に取れる表面の石はほとんど取り除いた。残業はなく、午後五時に勤務は終了した。その間、正社員が視察に来ることは一度もなかった。

次の仕事は屋外の煙突のペンキ塗りだった。焼却炉に備え付けられている高さが十メートルほどの煙突の外側をノミやヤスリで平らに磨いて、その後ペンキを塗るのだそうだ。

この仕事は少し危険だった。足場を組み、さらに梯子を伸ばして作業するのだが、不安

定な場所もあった。正社員の山中郁夫が現場監督だった。山中の顔は大きく、その目は細かった。眉はつり上がっており、不気味な印象を人に与えた。ほかに二名の正社員も加わった。若い武藤俊とベテランの重森達郎だった。

私は力を入れて煙突を磨いた。平らにしておかないと、ペンキが綺麗に乗らない。山中の眼もある。一方、他の正社員たちはのんびりと仕事をしていた。

「今村君、そんなにペースを上げると一日もたないよ。仕事もそうないのだから、ゆっくりやればいい」

そう言ってくれたのは重森だった。重森は山中と違って、落ち着いていた。煙突のまわりをゆっくり歩いているかと思えば、林のほうへ行つて煙草を吸っていた。作業場全体の動きを見ていることが多く、ときどき何かの指示を出していた。

一方、煙突の下では、山中が怒鳴っていた。あそこが汚い、ここが平らでない、と誰彼となく命令していた。私は梯子をひよいひよいと登ったり降りたりしながら、作業を進めていた。山中の言うことを無視し、自分の感覚で磨いていたが、仕事ははかどっていた。

佐川は煙突の下の方を磨いていたが、重森の言葉を聞いてからは、しばしば休憩をとるようになっていた。重森に習って、煙草を吸うために林に消えることが多くなった。

山中は佐川には何も言わずに、私に怒鳴り始めた。

「何をやっているんだ、危ないじゃないか。梯子は一段ずつゆっくりと降りしろ。お前が落ちて怪我でもしたら、会社に迷惑がかかるんだ。俺の言うとおりにしろ」

構内には次々とトラックが出入りしていた。森林の間伐材を運び込むものが多かった。家屋を取り壊して生じる廃棄物も運ばれていた。岩や砂利を積んできたものもあった。正社員の半数は運転手で、その他の半数が構内で働いていた。

騒音がうるさいにもかかわらず、構内にはハシボソガラスが多かった。ときおり群れをなして飛び回っていた。上空にはトビも目立った。カラスとトビはしばしば縄張りをめぐって争い、たいていの場合カラスがトビを追い払った。カラスのほうが強いというよりは、トビがこの場所に執着していないように見えた。カラスは何を食べているのだろうか。生ゴミは収集されていなかった。ただし、トラックが運び込むものの中には、多少の昆虫類や木の実が含まれているのかもしれない。重機が掘り返すゴミの中にも、カラスの食物があるのかもしれない。

昼食の時間に、重森が私を休憩室に誘ってくれた。休憩室は三室あり、私たちが入った

部屋にはベテランの正社員が集まっていた。中央に薪ストーブがあり、そのまわりに豪華な真紅のソファが二個置かれていた。臨時職員は休憩室にはおらず、各自の車の中で弁当を食べていた。ソファには、重森と武藤のほか、五十代と思われる島内栄一郎と皆藤茂樹がいた。ストーブからやや離れたテーブルでは、三沢たち女性社員が弁当を食べていた。三沢の表情や声のトーンから、彼女が女子社員のリーダーであることが明らかだった。女子社員の中に、一人だけ若い女がいた。地味な制服を着ていたが、その顔立ちはしっかりしていた。

「兄ちゃんはどこへ来る前は何をしていたんだ？」重森が口を開いた。

「しばらく働いていなかったのですが、その前はスキー場で雪を作ったり、ゲレンデの整備をしたりしていました。土木作業に従事していたほか、自動車工場で働くことも、川下りの筏を操ることもありました」

「家族はいるのか？」島内が訊いてきた。

「結婚はしていません。親も死にました」

「それなら身軽でいいな。好きなことをして一生を過ごすのは楽しいだろうな。俺たちはこの仕事には飽きているのだが、生活のためだと割り切っている」今度は皆藤が言った。

「この休憩室に、臨時職員は来ないですね。どうしてですか？」私も訊いてみた。

「居心地が悪いんだろうな。ここに来ると馬鹿にされると思って、遠慮しているんだ」重森が答えた。

「俺たちは何とも思っていないのだが。非正規職員が来てくれて仕事がやりやすくなったのは確かだ。中には役に立たないものもあるけどな」と島内が言った。

重森は小村とともに、この会社ではもつとも古株だった。高崎山のニホンザルの序列が、多くの場合、群れに加入してからの年月で決まるように、古参社員には風格と威厳があった。向こうのテーブルの女たちはしきりに喋っては笑っていた。いい加減な造りの建物には隙間風が入ってきた。女の笑い声と薪が燃える音が入り混じっていた。

週末になったが、まったく疲労を感じなかった。アウトドアで動き回っているときのほうがよほど疲れると思った。日曜日には、海際の防風林内の道を二十キロほど走り、まだ体力が落ちていないことを確認した。舗装されていない散歩道には落ち葉が重なり、その柔らかさが気持ちよかった。

次の月曜には風は止んでおり、私たちの仕事は海岸に漂着した木片やペットボトルを拾い集めることだった。正社員は誰もついて来ず、トラックの荷台一杯のゴミを集めるまで

は終了してはならないという指示だった。午前中にトラックから五百メートルほどの範囲を片付けると、午後には皆やる気を失っていた。こんなゴミを集めても、たいした儲けにならないことは明らかだった。私たちの仕事は意味がないのではないかと感じていた。佐川は石を拾っては海に投げていた。石が波の間を走っていく様がおもしろいらしい。やがて、次は楽天の田中だとか巨人の澤村だとか言い出して、その投球フォームを真似し出したが、私にはどれも同じように、しかもぎこちなく思われた。小林は草の上で昼寝をしていた。

近場のゴミを拾った後は、遠くから集めてこなければならず、ゴミはたまらなくなった。佐川は砂浜を歩くのが嫌になり、やがて横になったまま動かなくなった。仕方がないので、私と小林はできるだけ大きくて軽いゴミだけを、二人で協力して運んだ。

やがて午後五時を過ぎたので、荷台一杯のゴミはたまらなかつたけれども、私たちは会社に戻った。作業が終了したことを報告すると、荷台を見た三沢は、「何をしていったんだ。一杯になっていないじゃない。おまえらの魂胆がわかったから、明日からは毎日二時間残業してもらおうからね」と言った。

「残業したら賃金は上がるんですか？」と佐川が質問した。

「上がるわけがないだろう。仕事をさぼる奴は残業してやっとな並みなんだよ」

三沢は佐川を睨みつけた。私と小林も佐川を咎めるように見た。こいつがさぼらなければ、こういうことにはならなかつたはずだ。しかし、海岸のゴミ拾いはそれほど重要なのだろうか。重要ならば、正社員たちがすればよいではないか。

「この会社の収益源は何ですか」私は小林に訊いてみた。

「ゴミを集めてきて、それを仕分けしたり付加価値をつけたりして売るんだよ。家屋を解体すれば、解体料を得るだけでなく、そこから金属や木材が出てくるだろう。それらを集めて売るんだ。森林の間伐材、要らなくなった庭木や果樹の老廃木、伐られた街路樹などはすりつぶし、チップにする。チップはボイラーの燃料やパーティクルボードの原料として売る。また、チップやおが屑を養鶏業者へ売り、それらがニワトリの糞にまみれた後に回収して肥料にする。効率的にもうけられる無駄のない作業だ。ほかに、プラスチックやコンクリートも扱っている」

火曜日に私たち三人は八月から雇用されている柳田正行と、市内の家屋解体現場に派遣された。柳田は背が高く、体重も百キロを超えているように見えた。肩が太く、力強い印象を人に与える男だった。自営で大工をやっていたが、景気が悪くて仕事がないので、臨

時職員になったという。

柳田の指示のもとで、私たちははてきばきと解体作業を進めていった。屋根瓦の下から銅板を取り出して持ち帰った。畳の下や箆筒の中をていねいにしらべ、金目の物がなければチエックした。電線類もまとめてコンテナに入れ、あとで銅線を取り出せるようにした。一方、ゴミにしかない物は、焼却炉で燃やすために、まとめてトラックに積み込んだ。柳田の指示は的確であり、その身動きも素早かった。

一方、佐川は出てくるもの一つ一つに興味を示し、書類を読んだり、珍しい小物を自分のポケットに入れたりしていた。柳田も小林も注意をしなかった。仕事が終わったのは、夜の七時すぎだった。

それから少しして、私は叔父の善三を訪ねた。叔父の家は廃棄物処理場の入口から百メートルの距離にあった。叔父はすでに会社を定年退職しており、現在は田畑で米や野菜を作っていた。

「博君、まあ一杯飲もう。今日は泊まっていけばいい」

私の叔父は山歩きが好きで、何度かいっしょに登山をしたことがあった。奥さんのほかに、娘の真奈がいた。私より十二歳年下で、幼いときによく遊んでやった。長い髪を束ねてポニーテールにしており、大きな瞳は好奇心に溢れていた。

「あのゴミ屋に勤めたんだって？」真奈が訊いてきた。

「一時的にバイトをしているだけだよ。給料がいいので」

「あそこはほんとうにうるさいな。ダンプや重機の音で落ち着かないときがある。柄の悪い奴らばかりで、いじめられないかね？」善三が不快そうに言った。

「大丈夫ですよ。まだよくわかりませんが、おとなしそうな人が多いですよ」

「ダンプがゴミや土を道路に落とすまま行ってしまうことがある。それを注意しても、運転手は無視するんだ。今度、自治会長と文句を言いに行くつもりだ」善三の目つきは険しかった。

「私の友達が勤めているわ。山田悠美っていう名前」

「何をしているの？」

「事務員だと思う」

私は先日見かけた女だと思ったが、それ以上は訊かなかった。

その晩は叔父の家に泊めてもらった。深夜にふと目が覚めて会社の方を見ると、節電の

ために構内の電気はすべて消されており、ひっそりとしていた。真つ暗な処理場は気味が悪かった。

次に私たちは構内の掃除を任された。雪が積もるまでに、綺麗にしておきたいのだ、と重森が説明してくれた。とくにベルトコンベアーのまわりには、大小様々な落下物がこぼれていた。地面にはブルーシートがかけられており、その上に積もったゴミを片付ければよいということだった。

「汚いなあ。ブルーシートもどけて、綺麗にしよう」そう言ったのは佐川だった。ほかに仕事もないので、私と小林も同意した。

風が強かったので、ブルーシートの上の重しを取ると、シートやその上下の塵や埃が舞い上がった。飛び散る紙切れやビニール袋を、佐川はおもしろそうに追いかけていった。私と小林はブルーシートをやつとの思いで押さえつけて畳み、その上にコンクリートブロックを置いた。そして、大きなゴミから片付け始めたが、佐川は戻って来なかった。

じっとしていると、寒さがこたえるようになってきた。いつ、雪が降り出しても不思議ではなかった。カラスの群れはますます大きくなり、ときおり構内に降りては、カーカーと鳴いていた。

その日の夕方、臨時職員が集められた。八月から雇用された者も含めて五名だった。それによると、私たちの雇用は二月末までということだったが、三月末まで延長されるかもしれない。また、次の職を探すための活動が必要なら、一日に一時間まで休んでもよい、ということだった。

正社員がいなくなつてから、私たちはこの指示の意味について話し合った。佐川はもう帰っていた。

「県からもらつた予算が余っているのだろう。だから三月まで雇用しないと消化できないんだ」柳田が言った。

「もう二人辞めているからね。その分どこかで使わないと、つてことか」小林が続いた。「どうして、辞めたのですか？」私は訊いてみた。

「それは辞めた者に訊かないとわからないな。もつとよい仕事が見つかったのかもしれないし、いじめられて辞めた者もいるだろう。正社員は俺たちを馬鹿にしているんだ。彼らの身分は安定しているが、俺たちはじきに職を失うことになる。それだけで彼らは勝つた気にいるんだよ。そういう雰囲気嫌なのさ」柳田が答えた。

「俺は四月からの仕事を決めたところだ」そう言ったのは八月から働いていた石山玄治だ

った。石山は小柄な五十過ぎの男だったが、今でも早朝に新聞配達を行い、その仕事が終わってから、この会社で働いているらしい。

「今度は何をするんですか？」私は訊いてみた。

「福島で放射能に汚染されたがれきを片付ける仕事を募集している。一日、二万円もらえるそう。いいだろう」

そうこうしていると、正社員たちも就業時間が終わって戻ってきた。山中は若い正社員を数人引き連れて私たちのところへ向かってきた。

「おまえら、ここで油売っているのかよ。職務怠慢だな。いい身分だ」

「総務部から呼び出しがあつて、話を聞いていたところです」私が弁解した。

「ぼやぼやしていると首になるぞ」山中は私を睨んで言った。

「まったく、この会社は何を考えているんだ。役に立たない非正規を増やして、儲けもないじゃないか。社長はおかしいよな。将来構想も何もない、もうこの会社は終わりだぜ」

この会社が潰れて困るのは私たちではなくて山中たちだろう、いつも愚痴と文句ばかり言う嫌われ者だ。そんなことを考えていたら、また山中は私を睨んでいた。考えていることがすぐに表情に出してしまうのが、会社勤めの経験の乏しい私の欠点だった。

「山中さん、佐川さんと組むのはやりづらいのですが、交代してもらえないでしょうか。」

仕事のペースが合わないのですよ。お願いします」私は思い切って言ってみた。

「……おまえも文句か。非正規職員はわがままばかりで迷惑だ。しかし、まあ、考えてやるわ。まったくしょうがないな」そう言って山中は事務所の奥に消えていった。

翌日、私は小林、石山と同じ組になって薪割りを任された。佐川は一人で溝の掃除だった。私は少し肩の荷が下りたような気がした。

プラントに持ち込まれる木材のうち太いものは、チップにしないで薪にすることだった。薪は冬に需要が高くなる。また、薪を燃やして炭をつくると、さらに高く売れるらしい。

私たちはまず初めに乾燥した丸太をチェーンソーで五十センチほどの長さに切断し、それを電動薪割機の上に置いた。薪割機の奥側に刃があり、手前から薪を押し込んで割る仕組みだ。しかし、どの部分でも同じように綺麗に割れるわけではなく、木材をセットする位置は、その木材の節、枝、年輪によって微妙に異なっていた。癖のある木材は綺麗に割れないことが多かった。

私は上手く割れなかった薪を、昼休みに休憩室のストーブ用に持っていった。

「おお、薪をもってきてくれたか」重森たちは喜んでくれた。

「今村君はよく気がつくね。働いていて嫌なことはないかね」小村も声をかけてくれた。私は佐川のことを言おうかと思っただが、一緒に仕事をしなくなったこともあり黙っていた。その代わりに、山中が私たちに厳しく当たること、意地が悪いことをぼやいた。

重森は少し苦笑して、「また、あいつか。気にするな、それほど根にもつ奴じゃない。ただ、威張りたいたけだろう」と言った。小村も、「非正規職員の中には態度の悪い者もいるから、ああいう男のほう現場監督には向いているんだ」と説明した。

そこへ奥のテールから若い女がやってきた。

「あなたが真奈のいとこの今村さんね。仕事をしないで遊んでばかりいたんですって？」

山田悠美だった。

「ほう、何して遊んでいたんかい。女遊びか」そう言って正社員たちは爆笑した。

薪割の仕事は順調に進んでいた。一息ついて外を見ると、佐川が屋根瓦などの廃棄物を粉碎し分別するプラントで働いていた。他の従業員は地味な作業服を着ていたが、佐川の服は黄色だったので、すぐに見つけることができた。

回収された瓦などの廃棄物が破砕機にかけられた後にベルトコンベアーで流れてきた。そこには、瓦のかけらのほかに、銅線や真鍮のボルトなど、高額で売れる金属類もあった。それらを分別して、いくつもの鉄籠に収めるのが仕事であった。

佐川は金属片が流れてくると、それを手にとったあと、ダーツの矢を投げるように保管籠に狙いをつけ、何度か押したり引いたりしながら投げていた。はずしたら、それを拾いにいく。その度に佐川は少しがっかりしたように首をひねり、投げるフォームを何度も変えていた。ベルトコンベアーは間断なく動いており、その間にも瓦のかけらや金属が流れしてきたが、それを佐川が気にする様子は見られなかった。コンベアーの上部では、正社員がもっとも貴重なものを取り分けていたから、佐川のところにはたいしたものはない。のかもしれない。

三月末までの雇用延長の話が出た後、私たちの勤務時間はさらに延長されるようになった。徐々に仕事のノルマが増えて、午後七時をすぎても終わらなくなっていた。元々、正社員たちは遅くまで働いており、私たちもそれに合わせて残業するようになった。

2 トラブルメーカー

私は真奈と悠美を食事に誘った。悠美を通して会社のことを訊きたかった。とはいっても、まだ最初の給料を貰っていなかったので、高くもなければ安くもない中華料理店で待ち合わせた。

二人は揃ってやってきた。

「招待してくれてありがとう」真奈が言った。

「今日は山田さんにいろいろ教えてもらおうと思って、来てもらいました」

私たちは生ビールで乾杯し、料理を注文した。

「あの会社、儲かっているのかな。さぼっていても何も言わないようだけれど」

「とんとんだと思いますよ。仕事は困らないくらいあるし、コストが高いわけではない。

ゴミを加工して売るのでから少ない利益でも堅実だと言える。雪が降るとプラントの効率は落ちるけど、除雪の仕事が入ってくる。これがけっこう儲かるんです」

「悠美は経理もやっているから、何でも知っているはずよ」真奈が口を挟んできた。

「俺たちの中にさぼってばかりの奴がいるんだけど、誰も注意しない」

「佐川さんでしょう。もう有名になっているわ。あの人は、ここに来てすぐに、四月になったら正社員にしてもらえるか、と訊いてきたのよ。嘘を言うわけにはいかないから、その可能性はないと小村部長が答えたら、さぼることばかり考えている。だから、あの人は二月で辞めてもらう予定。あなたたち他の人は三月まで雇用を延長するらしい。それからね、ここに非正規で来る人たちを下手に叱ると、落ち込んだり、自殺を企てたり、会社の悪口を言ったりすることがあるの。県の補助を受けているので、問題を起こされると会社も困る。あなたたちが収益を上げることが期待しているのではなくて、あなたたちを雇用することによって、県や市とのパイプを太くして、公共事業を獲得することが目的なのだから。実際、この夏から秋にかけて公共施設を解体する下請け仕事を貰えたのよ。そういうのは入札で決まるのだけれど、パイプが太いといういろいろいいことがあるというわけ」

「悠美、ちょっと失礼よ。博君落ち込んでしまうわよ」真奈が冗談っぽく言った。

「いや、本当のことを教えてもらったほうがいい」

「社長はどんな人？ 見たことがないのだけ」

「めったにこの会社には来ないわ。ほかにも建設会社や飲食店を経営している金持ち。だから、会社の細かいことは小村さんにまかせているのよ」

数品の料理が次から次へと運ばれてきた。私たちは少しずつ酔っていった。悠美もしだいに饒舌になった。

「山中はどんな奴？」

「それはね、普段威張っているけど、実はだめ男なのよ。もっとひどいのがいるから、だめ男ナンバー2ね。この会社の主力はトラックや重機の運転手。冬になれば徹夜で除雪作業をする連中なんだけれど、山中は事故ばかりおこして失格者扱いになり、首になるところだった。それを小村さんが可愛そうに思っ、仕事の仕切り役に回してやったのよ。非正規従業員が増えて威張れるものだから、このところ調子付いているだけよ」

「そんなことは全くわからなかった。でも、あいつは時々俺のことを睨むんだ。何か恨みを買ったのだろうか？」

「あなたは評判いいのよ。まわりに合わせて、上手に仕事しているし、いちいち言わなくても必要なことをしてくれるから。薪をもってきてくれるのも喜ばれている。それで山中は脅威を感じているのよ。自分の地位をあなたに奪われるのではないかと」

「正社員になる気はないのだけれど……」

「そんなことを言っ、また春になったら遊びまくるの？ そんな人生でいいの？」そう言っ、口をはさんできたのは真奈だった。

仕事の話ばかりでは、真奈はおもしろくないだろう。私は真奈がアイドル好きなことを知っていたので、このごろ流行っているAKBやカラ、少女時代などの話をした。それから二人は、私にはわからない友人の話で盛り上がり、ついていけなくなった私は話を聞くふりをして何も聞かずに、焼酎を飲み続けた。

とうとう雪が降ってきた。夜の間に一気に積もり、作業場での仕事は除雪になった。プラントとくにベルトコンベアの上の雪をどけ、さらに下に溜まった雪を林に捨てた。

午前中に除雪が終わったので、午後からは薪割りにとりかかった。小林が休みを取ったので、代わりに佐川がチームに入った。佐川は割れた薪を鉄籠に収納する係だった。初めのうちは、まじめに働いていたが、やがて飽きてきたのか、薪を鉄籠に放るようになった。まとめて放っ、あとで片付けるのだという。佐川は私の薪の割り方にも文句を言い出した。

「木が曲がっていると、機械では綺麗に割れないねえ。これでは商品にならないよ」

そう言っ佐川はナタを振り回して、腕力で木材を割ろうとした。しかし、機械を使っ、たほうが効率的に決まっている。何度ナタを打ち付けても、木材は割れなかった。それでも佐川は繰り返している。私は頭にきて佐川を怒鳴りつけた。

「何をやっているんだ。さつきからちつとも作業が進まないじゃないか。あんた一人のせいで、俺たちまで迷惑している。少しはまわりを見て作業したらどうなんだ！」

それに対して、佐川は少し驚いた素振りを見せたが、やがて私の目をじっと見つめ、そして笑った。私は気味が悪くなって、それ以上何も言わなかった。

昼休みの休憩室でも佐川の行動は話題になり始めてきた。佐川が何でも投げたがるので、皆は佐川のことをピッチャーと呼んでいた。佐川が大学を出ていることも暴露され、それにしては頭が悪い、と嗤われていた。

私は仕事が終わってから悠美を食事や映画に誘うようになった。車で二十分ほど走ったところに、大型のショッピングセンターができていた。田んぼの中にできたので、広々していた。レストランやスーパールのほかに、シネコンもあった。新しい建物、広い駐車場、すべてのものが綺麗に整頓されている店内、笑顔で満ち溢れた家族連れ、それらのすべてが廃棄物処理場では見られないものだった。

大勢の人たちが歩いている中を、私はすいすいと抜いていった。

「速すぎる。どうしてぶつからないで、そんなに速く歩けるの？」

「カヌーをやっていたから、障害物を避けるのは簡単なんだよ」

「カヌーって、海で浮かべる船のこと？」

「海でシーカヤックを使ったこともあるけれども、もっぱら楽しんだのは川の激流下りさ。岩がごつごつ出ている激流をカヌーで下るんだ」

「危ないじゃないの。ひっくり返ったらどうするの？」

「たまにひっくり返ることもあれば、カヌーから投げ出されることもある。それでもヘルメットを被っているし、救命具も身につけているので大丈夫だ。仲間といっしょに下っているから、どうしようもないときには助けをもらえる。実際に助けを求めたことはなかったけどね。激流を求めて全国を旅した。吉野川は楽しかったな。吉野川の小歩危には三月くらいいたことがあった」

そう言いながら、私は人の波を超えていった。悠美は必死についてきた。

「カヌーで危険なのは、下る流れではなくて、大きな淵で下に向かう流れだ。渦が巻いていて、下降流に巻き込まれて岩の穴に吸い込まれると、抜けられなくなって死んでしまうことがある」

「どうしてそんなに危険なことをするの？」

「おもしろいからさ。危険が大きいほど体がぞくぞくする。でもカヌーでは死にかけたこ

とはないよ。今までで一番怖かったのはオオトカゲだ。バイクでオーストラリアの砂漠を走っていたときに、二メートルもあるオオトカゲが左から突進してきたんだ。餌だと思っただのか、縄ばりを荒らす敵だとみなしたのかは、わからなかった。ともかく、あいつとぶつかったらたまらないと思い、少しあせったけれどもスピードと方向を読んで、間一髪で避けることができた。助かったと思ったよ。それでもその三日後に、タイヤが全部パンクして、修理が効かなくなり、近くの村まで歩いて行かなければならなくなったんだ。近くの村といっても、バイクを引きずりながら二日もかかったんだ。水と食料は持っていたが、ぐったりと疲れたよ」

悠美は私を横から見つめ、「すごい」とつぶやいた。

「ここでコーヒーを飲もう」私はカフェに入り話題を変えた。

「佐川って大学出ているんだって？」

「それも国立大学よ。人は見かけではわからないね。でも学歴が高くてもだめな人っていうし、そもそもうちにやってくるだけで、たいしたことないものね」

「それは皮肉か？」

「あら、ごめんなさい。あなたは特別よ。趣味に生きていて、働く気がなかったのだから論外よ」

「それは褒めているのかなあ」

「もちろん褒めているのよ。お金のために時間を浪費することを拒否しているのだから、それはそれで立派なものよ。私はあなたが他の従業員とはちがうから興味を持ったのよ。ただお金を稼ぐのではない何かを感じた、と言ってもいい。その何かをつきとめたいと思っっているのだけれども、教えてくれない？」

私はどう答えたらよいかわからずに黙っていた。その沈黙を打ち消すように、「ねえ、カラオケ行かない。年末に職場で忘年会があり、そこでカラオケをやるのよ」と悠美は言った。

「カラオケ？」

「忘年会に出る以上、何か歌わされるから、練習しておきましょう」

私はそもそもカラオケに行くことがなかったので、歌うことに慣れていなかった。好きな歌もなかったの、悠美の歌を聴きながら覚えていった。あの会社に向いている演歌などはまったく歌わず、もっぱらAKBやサザンの歌を練習した。

寒さが一段と厳しくなってきたので、臨時職員の何人もが昼休みになると休憩室で昼食を取るようになった。佐川は薪ストーブの前で床に座っていた。重森たちがストーブの近くに来いと言ったためだが、ソファーは正社員で一杯であった。

他の臨時職員たちは、ストーブから離れた場所に座っていた。ソファーに座った正社員の前で低い姿勢で薪をくべる佐川は、何だか卑しめられているようだった。私はその後ろで弁当を食べながら、佐川の様子を観察した。

正社員たちはソファーから佐川に次々に質問した。「大学で何を勉強していたのか」とか、「野球の経験はあるのか」とか、馬鹿にしたようなことばかりだった。そのたびに佐川は「何も」とか「はい」とか、小さな声で短く答えていた。

たまりかねた重森が後ろを振り返って、一人で新聞を読んでいた正社員に声をかけた。

「おい、玉川、佐川と薪をくべるのを代わってやれ。このままでは、佐川は飯を食べないだろう」

玉川靖はまだ三十代の正社員で、プラントのベルトコンベアーの担当だった。おとなしくて、大きな声を出すのを聞いたことがなかった。いつも人の言う通りに動いていた。玉川は何も言わずに、佐川の代わりを務めた。佐川はストーブから離れた机で弁当を食べた。

その日の夕方に小林が挨拶に来て、新しい仕事を見つけたので、この会社を辞めると言った。ハローワークを通さずに、働いてみたい会社に直接行って、自分の持っている技術や職歴を説明したところ、運よく雇用されることになったらしい。

私は朝の出勤前に海辺に立ってみた。暴風は海水を掻き立て、砂丘を巻き上げて、内陸に向かっていった。防風林に吹き付ける風の音はますます大きくなり、空を舞うトビが大きく揺れていた。私は雪と塩水と砂が入り混じった風を全力で受けとめてみた。どんな暴風でも、鍛え上げた私の体はびくともしなかった。

この会社は二十九日まで通常営業で、新年は八日からだという。そして悠美が教えてくれたように、二十九日の晩にカラオケ大会が開催されることになった。正社員、臨時職員はもちろん近所の住民も参加できるイベントで、職員を慰労するとともに、近所の人たちとの親睦を深めるために開催されるらしい。

私は毎日のように悠美とカラオケに行った。歌の合間に悠美に訊かれたので、日本国内ならば、たいていの場所に行ったことがあると答えた。外国はそれほどでもないが、オーストラリアとニュージーランドのほかに、香港と台湾に住んでいたことがある。香港の貧民街で向こうの奴らとマージャンばかりしていたことがなつかしかった。アフリカにも釣

りがしたくて旅行したことがある。そういう旅行を計画するたびに、その費用を稼ぐために働いた。

悠美は自分も旅行したいから、いつかいつしよに行こうと言った。しかし、私は汚いところで寝泊りして、粗末なものを食べていた。そんな旅に悠美は耐えられないだろうと思っただ。

雪が積もるようになってから、構内の仕事は減っていた。トラックが持ち込むゴミの量が少なくなったからである。トラック運転手の何人かは除雪作業に向かっていた。それにもかかわらず、職場では小林の代わりに、二名の臨時職員が加わった。一人は弘道徹。肉体労働で鍛えたのであろうか、筋肉隆々の精悍な男であった。無口で、休むことなく仕事を続けようとする。仕事は限られているのだから、無理をしても仕事がなくなるだけだ、と私が言っても、その意味がわからないらしい。薪割ばかりやるので、売れ残った薪が山積みになっていた。薪を入れる鉄籠も残りがわずかである。

もう一人は、仁藤房子という女だった。四十歳くらいであろうか。この女もよく働いた。男に比べると体力はないが、こまめに、しかも的確に仕事をした。掃除などは、男に比べて丁寧で速かった。仁藤は山中にも臆することがなかった。「お前みたいな女に仕事ができるのか？」と山中に言われたときには、「みんな聞いたか、こいつ女性差別発言をしたぞ。ハローワークに告発してやる」と反発した。山中はそれから何も言わなくなった。

忘年会は重機の格納庫を一時的に開放して行われた。近所の住民は誰も参加しなかった。寒いので、方々で薪を焚いていた。テーブルの上には、社員が持ち寄った食物が並んでいた。その中には、しし肉や山芋、地鶏、朝どれのサバやワラサがあった。ほかに会社がスーパードで買ってきた焼き鳥や惣菜もあった。

社長の顔は大きく、まだ夏の日焼けのあとが抜けていないように見えるほど黒かった。背が高く、がっちりしていたが、顔の表情は思っていたより柔和であった。毎日うまいものを食べて、ゴルフでもしているんだろうな、クルーザーでも持っていて船釣りを堪能しているかもしれない、などと私は勝手に想像した。しかし、社長と話をする時間などなく、簡単な挨拶と乾杯の音頭をとってから、社長は足早に帰っていった。

その後は、皆で薪を焚いたドラム缶の上に大きな鉄板をわたして、肉や野菜を焼いて食べた。

「今村君、たくさん飲めよ」重森が声をかけてくれた。

「重森さんもご苦労様です」私も重森にビールを注いだ。

重森のまわりには、小村のほか、島内や皆藤がいた。臨時職員では柳田のほか石山、弘道、仁藤も加わっていた。

弘道はただ働くだけのまじめな男だと思っていたが、よく喋ることがわかった。

「重森さんはこの作業場の要ですね。いろいろ厄介な人がいるけれども、重森さんがいるから、上手くいっている。経験を積んでおられてさすがです」

「そんなことはないよ。俺は適当に働いているだけだ」重森は照れながら言った。

「小村さんは実質社長ですね。ここまで会社が大きくなったのは、小村さんの功績ですよ。さつきまでいた社長は、何も仕事の指図はしないし、お飾りのようなものですね」

「弘道君、そういう言い方はよしたほうがいいよ。私はただのサラリーマンだ」

「謙遜されるところが小村さんのすばらしいところですね。尊敬しますよ」

私は柳田や石山と、登山、釣り、山菜取りなどの趣味や、これまでに働いた職場での嫌な上司や信じられない社員について話をしながら、盛り上がっていった。仁藤は他の者たちにビールを注いでいた。

山中は若い社員と別のグループにいた。玉川も山中のグループにいた。悠美は女子社員のグループだった。一方、佐川はどこにも落ち着かず、することがないからか薪をくべて回っていた。

「おい、佐川こっちに来い」その声をかけたのは山中だった。「ここで一杯飲み」そう言って山中は佐川に焼酎を注いだ。私は何が起こるのか興味があったので、山中と佐川を観察した。

佐川は言うとおりに椅子に座り、焼酎をコップで飲んだ。

「お前はほんとうに要領の悪い奴だな。本気で働くつもりがあるのか？」山中の攻撃が始まった。

「……」

「うちの会社も遊びで人を雇っているんじゃないんだぜ。しっかり働いてもらって、ゴミを金に換えるんだ。何でもかんでも投げてばかりでは片付かないし、売り物も集まらない。わかっているのか？　ほかの連中は、少し指示すれば後は自分の頭で考えて、作業を進めていく。ところがお前は、いくら言っても仕事を覚ええない。遊んでばかりで成果がない。むしろ、後片付けに手間がかかって、いないほうがいいくらいだ。何か得意なことはないのか？　これまでやってきて習熟した仕事はないのか？　そういうものがあれば、こっち

もそれをやらしてやるつもりだ。何も得意なものがないというのは、これから生きていけないじゃないか。どうなんだ！」

「……………」

「俺たちはお前のことを心配しているんだよ。だから、皆ほんとうに迷惑しているんだけど、口には出さないんだ。お前がいつかちゃんと仕事をするだろう、と待っているんだ。わかるか、まあ飲め」

山中は焼酎をさらに注ぎ、佐川も飲んだ。

「佐川さん、頑張ってくださいよ。俺たちは期待しているんですよ」そう言ったのは武藤よりも若い正社員だった。

「わかるか、これくらいわかるよな、大学出ているんだからよ」山中の目つきは厳しくなっていた。「いったい大学で何を勉強していたんだ。何か役に立つことを教わったんだろうな」

「俺たちにも教えてくださいよ。大学の知識を」別の正社員が追撃した。

佐川は下を向いたままだった。

「黙ってばかりではわからないだろう。俺たちは友達になりたいんだ。何かやってくれよ。そうだ、踊ってくれたら皆盛りあがるぜ。いつもやっているテクノダンスがいい。銅線なんかを投げるピッチャー踊りだ」山中が言うと他の正社員たちも大笑いした。

そこへ三沢もやってきて、「あんたが仕事をするよ、その後片付けが大変なのよ。役に立つどころか余計な手間がかかるから、いないほうがましなのよ。自分でそう思わないの？」と言った。

「まったくくだ。おまえのせいで俺たちの仕事は増え、会社は損をしているんだ。せめて宴会くらい盛り上げてくれよ。さあピッチャー踊りだ」山中は引き下がらない。

やがて山中の取り巻きは手拍子を始めて、佐川の踊りをうながした。佐川は仕方なく手足を動かしたが、あまりにぎこちなく、正社員たちは大笑いした。

「この下手くそが」と言っつて、山中は佐川の頬を平手打ちした。

「お前も何か言っつてやれ」と次に山中は玉川に指図した。玉川はずっと下を向いて飲んでおり、初めは山中の言うことが理解できないようだったが、やがて佐川を見て小さな声で言った。「だめな奴だな、お前は。無能者！」

その様子を見ていた重森は「ちょっとやりすぎだな」と呟き、小村は「今村君、佐川をこっちに連れてきてくれないか」と言った。

私は山中のテーブルに向かい、「佐川さん、向こうへ行きましょう」と言った。佐川は山中の顔を見た。

「何だ、何だ、こっちで楽しくやっているのに妨害するな。非正規が偉そうなことを言いやがって。とっとと向こうに行け」

その場にいたほかの正社員たちも、私に嫌な顔を向けた。

「あなたが過ぎるから、向こうに連れて行くように部長に言われたんですよ」私は言い返した。

「お前は小村の子分か。馬鹿たれが。プータローだったくせに、うちの事務員と付き合っているらしいな。身分をわきまえる。隅で小さくなっていればいいんだ。何様のつもりだ」悠美のことを言われて、私も熱くなった。山中を殴りつけてやろうかと思ったが、それでは悠美は困るだろう。私は山中を睨み、山中も私を睨んでいた。佐川はこの間にどこかへ消えていた。

「何をやっているんだ」と言って重森が私たちのところにやってきた。「今日は忘年会だ。慰労のためなのに、何でいがみ合っているんだ。もうやめろ」

重森の声は普段と違って、低く重かった。「山中よ、お前だって偉そうなことは言えないだろう。これ以上、騒動を起こすようなら、お前も辞めてもらうからな」

「こいつ、臨時職員に暴言ばかり吐いているんだ。首にしてくれないかな」と後ろから大きな声で怒鳴ったのは仁藤だった。小村は迷惑そうな顔をしていた。

気がつく佐川は消えており、山中はそれ以上何も言わなかった。会場には気まずい雰囲気の流れ、カラオケをやるうとする者はいなかった。その後は、一人、二人と帰っていき、残った者も小声でひそひそと話をするだけだった。山中に言われたので、私は悠美にも声をかけなかった。ただ、佐川がどこへ行ったのが気になったので、構内を捜しに行った。

山中の担当は焼却炉と煙突である。その十メートルほど横に、これから燃やす予定のゴミが積まれていた。佐川はそのゴミの向こう側にいた。小さく屈んでいたのも、佐川は泣いているのではないかと私は思った。しかし、近づいて正面を見ると、佐川は先が燃えた小さな木片をゴミにあてていた。ゴミのうち紙くずや落ち葉がオレンジ色に燃えかけていた。私はとっさに木片を奪って後ろに放り、佐川を突き飛ばし、燃えかけのゴミを踏み潰して、その火を消した。

「誰にも言わないから帰れ」と私は叫んだ。

佐川はそのまま走っていった。満月がくつきりと浮かんでいた。冷え切った冬の空は妙に静かだった。

3 退職に向かつて

冬休みになった。私は歌うつもりだったのに歌えなくなったので、悠美とカラオケに行ったり、蕎麦を食べに行ったりした。その後、銀行に行くと、初めての給料が振り込まれていた。年末なので、振込が少し早まったようだ。

大晦日には、悠美をホテルに誘った。人に知られなくなかったので、車で一時間、内陸に向けて走り、山の中の地味なホテルに入った。

悠美が入浴している間に、私はこれまでにつき合った女のことを思い出していた。アウトドア活動を通して出会った女とは、最初は楽しかったが、登山にしても釣りにしてもカヌーにしてもレベルが合わず、結局うまくいかなかった。会社勤めでは、私のほうが長続きせず、すぐに退職することになったので、それが別れとなった。悠美と私はどうなるのだろうか、そんなことを考えていた。

それでも私は悠美を抱くことによって、心の底から満たされた気がした。それはなぜだろうか？ 自分の性欲が満たされた充足感のせいか、正社員である悠美を征服した達成感のせいか、それとも自分が必要とされているという自負心のせいか、私にはわからなかった。

窓の外では雪が激しくなってきた。重そうな雪で、帰り道は難儀だと思った。正月を前にして泊まっていくわけにはいかない。

それでも私たちは、ベッドで横になって紅白歌合戦を見ながら、余韻に浸っていた。

「小さいときに、いじめにあったり、逆に誰かをいじめたりしたことある？」と私は訊いた。

「男の子どうしでは、いろいろあったみたい。でも女の子は仲良かったわよ。ああ、そういえば、高校のときに歴史の先生をいじめたことがあったわよ。いじめたっていうか、その先生は依怙贗履をしたのよ。勉強ができて真面目な三人の女子生徒ばかり褒めて、何かあると、その娘たちにはばかり質問して答えさせたの。それで、高校三年の最後の授業で、男の子は全員コートを着て授業に出たんだ。まだ寒く雪が舞っているときに、教室の窓ガラスをすべて開放して。私たち女子生徒は、可愛がられた三人を残して、皆教室から出て

行った」

「わあ、怖いな。女子生徒のほうがきつい」

「もうみんな就職も大学も決まっていたから、仕返しされる恐れもなかったしね。でも無視といういじめは、一番つらいかもしれない。教師としては全否定されるようなものだったから、ちよつとやりすぎた、と今では反省している」

「佐川はいじめられていると思う？」

「忘年会の山中たちは言いすぎだったよね。でも、佐川はすぐにさぼろうとするし、仕事もきちんできないから、多少言われるのは仕方ない」

「わざとふざけているのかな？」

「真面目に働いても、すぐに雇用期間は終わりでしょう。それなら、さぼれるだけさぼり、遊べるだけ遊ぼうと思うのかもしれない。それはそれで合理的な考えだわ。ただ、この小さな町で、佐川がどういう人間か知れ渡ってしまうと、次から仕事はなくなるかもしれない」

「まったく馬鹿な奴だったな。毎日腹が立っていたよ」

「あなたたちは佐川のことを見下して、自分は佐川よりはずっとましな人間だと思っていたでしょう。でも、それこそ会社の思うつぼで、会社が恐れているのは、あなたたちの不満や攻撃が一致団結して会社に向かうことであり、非正規どうしがもめごとを起こしたり、そのうちの誰かを下等だと考えて自己満足に陥ったりするのは大歓迎なのよ。そういう意味では、佐川や玉川は会社にとって役に立っていると言えるんだ」

「ふーん、そんなものなのかなあ。俺にはよくわからないよ。それよりも早く次の仕事を見つけないとだめだな」

「廃棄物処理なんかでなくて、あなたに合った仕事を見つけてなさいよ」

「どんな仕事？」と私は訊いたが、悠美は黙っていた。

元旦には神社に行っておみくじを引いた。悠美は小吉で私は大吉だった。働いてお金が貰えるからかな、と思った。神社で飲んだ甘酒がとてもおいしかった。二日には叔父の家に行き、ふだん会わない親戚と会った。真奈が、私が働き始めたことをばらしたので、子供たちにお年玉をあげないわけにはいかなかった。そのほか、欲しかった釣道具や登山靴を買ったら、あつという間に給料はなくなった。

新年の初出勤日には、ベルトコンベアの上に雪や氷がたまっていた。ベルトコンベアはいくつもあり、重要なものは屋内にあった。私たちは屋外のベルトコンベアを担当

した。その責任者の玉川はあまりに多くの雪を見て、立ちすくんでいた。

「皆で取り除きましょう」と私は言った。気温は低く、このまま待っていても融けそうになかった。玉川は自分では判断がつかず、指示をもらうために事務所へ戻った。

やがて私たちはスコップでベルトコンベアーの雪を降ろしにかかった。コンベアーのところどころでは、雪が凍っていた。これを放置すると、流れているものが氷や雪と混ざって、大きな塊になってしまう。その塊はベルトコンベアーを詰まらせるので、氷や雪は丁寧に取り除く必要がある。しかし、佐川はスコップを突いて氷の塊にあたると、すぐにあきらめて柔らかい雪だけを取っていた。

コンベアーの台車部分も凍っていた。とくにコンベアーが低い場所では、台車に張り付いた氷を取るのがむずかしかった。私は腹ばいになって頭を突っ込んで、氷を取り除いた。その様子を見ていた佐川は、自分もやると言い出し、同じように頭を突っ込んだ。しかし、按排がわからないために、突っ込みすぎて戻れなくなり、足をばたばたさせていた。その尻を玉川はスコップで叩きつけた。佐川はさらに深く台車の奥へめりこみ、「助けてくれー」と叫んだ。まわりの者たちは笑っていたが、このままではまずいと思ったのか、仁藤と柳田が佐川の足を持って引きずり出してやった。

やっと出てきた佐川は正面から玉川に体当たりした。「おまえ現場責任だろう。なんで俺を突いたんだ」

「遊んでいる奴が悪い」玉川は佐川を突き返して言った。

「そもそも、おまえがやるべき仕事だろう。何年も働いているんだから、やり方くらいわかるだろう」佐川は自分よりもさらに背の低い玉川に、上から顔を近づけて怒鳴った。その顔は真っ赤だった。

「自分でやるっていつて失敗したんだろう。それを俺の責任にするな」玉川はもうこいつの相手をするのは嫌だというような表情で、佐川を突き放した。

私たちが止めようとしたところに、山中がやってきた。

「お馬鹿さんどうしの喧嘩か。おもしろいじゃないか」と山中は笑いながら言った。「どっちが強いか殴り合ってみろよ」

それを聞いた二人は互いにパンチを繰り出したが、顔をそむけながら短い手を振り回すだけで、遊んでいるようだった。そこへ山中が割って入り、思い切り玉川の顔を殴りつけた。

「おまえはこの現場責任だろう。トラブルの責任はお前にあるんだ。反省しろ」そう言

って山中は自分の現場に戻っていった。それでもベルトコンベアーは順調に動き出し、何事もなかったかのように、仕事は進んでいった。

日曜日に、私は気分転換に釣りに出かけることにした。以前、釣りが好きだと聞いていた重森を誘った。ほかに、このことを聞きつけた弘道もやってきた。私はルーアーフィッシングが得意で、磯の餌釣りはほとんど経験がなかったが、重森が得意とするクロダイを狙うことにした。

クロダイは一年中釣れる魚だが、暖かい季節には小アジやフグ、小メジナなど様々な小物に餌を取られてしまい、釣りにならないことが多い。その点、冬場は餌取りがいなくなくて、クロダイだけを釣りやすくなる。

釣具屋でつけ餌のオキアミと撒き餌を購入し、私たちは堤防の先端に向かった。朝から晴れて日が照っていたので、コンクリートの上に積もった雪は消えていた。私たちは外海側のテトラポットの上に釣り座を確保し、仕掛けをセットした。釣れるといっても、一日に二、三尾も釣ればよいほうである。私たちは撒き餌を放ってクロダイを集めつつ、オキアミを針にさし、テトラポットの先に投入した。とはいっても、すぐに釣れるはずはない。私たちは世間話を始めた。

「重森さんはあの会社で何年働いているのですか？」

「高校を出てからずっとだよ。四十年になるかな」

「会社にも歴史があるんですね」

「今の社長に誘われて廃品回収から始めたんだ。たった三人の小さな会社だった」

「それなら、随分大きくなっていくんですね」

「社長はその後いろいろな事業を始めて成功していった。俺はしよせん使用人だから、給料が多いわけではない。それでも社長との関係はよく、クビになる心配はなかった。家庭をもつて、嫌なこともあまりなかったな。仕事も楽しかった。ゴミを片付けて減らすことが嬉しかったんだ。それだけ人の役に立つという充実感があつたからな。さらに、会社を始めた一九七〇年代からゴミの不法投棄が厳しく取り締まられるようになり、ゴミの分別や再利用が進んだ。ゴミが再生されて役に立つんだよ。その波は今日までずっと続いている。これほど安定した商売はないだろう」

私は重森があまりに満足げなので、少し意地悪な質問をした。

「毎日、同じような仕事ばかりで飽きないですか？」

「そんな贅沢は言えないよ。俺にはゴミのこと以外わかることはないんだ。それでも雇い

続けてくれている会社には感謝している。この後、今の会社を辞めたら、次に雇ってくれるところはないだろう。ゴミ屋で働いていたというのと、その人間の中身も見ずに馬鹿にする奴らがいるからな」

そのとき重森の浮きが勢いよく垂直に消しこんだ。小物の当たりではない。すかさず重森が竿をあおって合わせると、魚は竿を大きくしならせて抵抗した。竿先が水面にめりこむかと思われた後、重森は大きなクロダイを徐々に浮かせ、やがてタモ網に取り込んだ。五十センチは超えている大物だった。

少し離れたところで釣っていた弘道は、重森が釣ったのを見て飛んできた。

「すごいな、俺はこんなに大きいのを釣ったことがないですよ。重森さんはほんとうに釣り名人ですね。よし、俺もがんばるぞ」そう言って弘道は自分の釣り座に戻っていった。

「会社で誰かに指図されることはない。社長はほとんど小村と俺に任せてくれている。問題を起こす社員がいないわけではない。地域住民の理解を得るのもむずかしいが、昔に比べれば、環境に役立つ仕事だと評価されることが多くなってきた」

「会社を始めたもう一人の仲間って、小村さんですか？」

「いや、小村は会社を始めて五年後に、入ってきたんだ。大学を出ていて経理や行政にもくわしかった。会社が大きくなるには、どうしても必要な人材だったんだ。それで志田は、あ、志田明というのが、最初に始めたもう一人の仲間だ。小村が入って、会社が大きくなっていった頃に辞めたんだ。まだ二十代だったし、もっといういろいろな仕事をしたい、この仕事は単調で面白みに欠ける、と言っていた。小村が加わったことも、志田に何らかの影響を与えたのかもしれない。それまでは皆、好き勝手に仕事をしていたが、小村はそれを管理して効率的にしようとしたからな」

「志田さんの気持ちがわかるような気がします。それで志田さんは今どうしているのですか？」

「その後、東京に出て行って、市場で働いたり、映画会社で雑用係をしたりしていたらしい。その頃には、ときどき葉書をよこすことがあったし、電話で無駄話をしたこともある。ただ、二十年前から音信不通になってしまった。どうしているんだろう、と思っていたら、去年ふいに会社にやってきたんだ。そのときは驚いたね。すっかり立派になっていったんだ。どこの紳士かと思ったよ。も神奈川で起業して、社長になっていたんだ。人材派遣業というか、何でも解決する会社らしい。ゴミの始末、ペットの面倒、環境調査、家政婦、蜂の巣退治に家庭教師まで、それぞれの専門家を登録させておき、必要に応じて派遣する仕組

みだそうだ」

「それはすごいですね」

「でもな、志田だって成功したのには、運が味方したのだろう。俺たちが知らない、たいへんな努力をしたのかもしれない。安定な生活を捨てて別の世界に飛び込むと、経済的に困窮してかえって不自由になることがある。どちらを選ぶのか、むずかしいな。今村君もそれで悩んでいるんだろう」

「まあ、そうですね、ここのところ会社のおかげで収入があるので嬉しいです」

「それもあと少しで終わってしまうだろう。不安定なことには変わりない。ちよつとまとまった金が入ったからといって、浪費してはだめだ」そう言って、重森はにこりと微笑んだ。

二人とも話し込んでいたので、釣針につけた餌のオキアミはなくなっていた。餌を付け直して投入することを繰り返したが、その後は小さなメジナ以外、何も釣れなかった

一月も半ばになって、積雪量が多くなってきた。正社員の多くは重機を使った除雪に出かけていた。深夜の作業もあるらしい。構内では、臨時職員と少数の監督だけが残ったが、午前中は降り積もった雪を取り除くだけで終わることが多くなった。それでも、たまに天気がよいと雪は銀色に輝き、小鳥のさえずりが心地よかった。ひととき美しい鳴き声を聴かせてくれたのはベニマシコだった。赤い色の鳥でノイバラやウグイスカグラの実を食べながら、チュルチュル、ピッピ、フィツフィツなど、よく通る声で鳴いていた。

臨時職員の大半は次の勤め先が決まっておらず、落ち着かない日々を送っていた。ハローワークに行っても、何もないらしい。それでよくよしても始まらないということ、宴会を開くことにした。少し遅い新年会だ。ただし、正社員は呼ばないことにした。忘年会の二の舞は御免だった。経費節約のために、新年会は仁藤の家で開くことにした。料理の心得があるという柳田と弘道が手伝うことになった。私は買出し係で、朝早くに起きて市場に行き、魚を買うことになった。

狙うのは底引きや刺し網で獲れた魚で、一箱二千円ほどのものを数箱も買えば、新鮮な魚を大量に入手することができた。波が収まっていたので、フッコ、カマス、アジ、マグチにメジナと様々な魚が並んでいた。このあたりの海が豊かであることを証明するものだった。一方で、大型のマダイやアンコウ、ハタなどには、驚くような高値がついていた。

仁藤の家は田んぼの真ん中にあり、家の周囲は屋敷林に囲まれていたので、いくら騒い

でも隣人を気にする必要はなかった。土蔵のある古い家だったが、小奇麗に掃除されていた。私が持っていった魚のほかに、各自が持参した野菜や肉があったので、食材は十分だった。

仁藤の夫は入院中だった。何の病気かは訊かなかった。中学生の娘が仁藤を手伝っていた。ほかに高校生の息子がいたが、こちらは庭で遊んでいた。その相手は佐川だった。二人でピッチャーとキャッチャーを交代しながら、キャッチボールをしていた。佐川が柔らかに笑うのを初めて見た。

やがて、刺身、煮魚、鍋などが調理されて大広間の卓上に並べられた。

「さあさあ、皆さん、今日はよく集まってくれました。新年会を始めましょう。それでは柳田さん、最年長ということでご挨拶と乾杯の音頭をお願いしますよ」

「え、俺の挨拶でいいのか。それではまあ、新年おめでとうございます。われわれ臨時職員ということで日々肩身の狭い思いをしているわけですが、今日はそういうことを忘れて宴会を楽しみましょう。俺たちは皆同じ立場で、地位の上下はありません。自由に思うことを言い合い、親睦を深めましょう。それでは乾杯！」

皆も乾杯と言って、ビールジョッキをぶつけあった。未成年はウーロン茶での乾杯だった。佐川は高校生の祐樹とだけ乾杯した。

「仁藤さん、今日はお家を使わせて頂いて、ありがとうございます。おかげで会費も安くすみそうですよ」柳田が礼を言った。

「いえいえ、皆さん毎日寒い中を頑張っているんですからね。このくらいどうってことはないですよ。日々の憂さを晴らして楽しく飲みましょう」

「今日の刺身は美味しいなあ、何と言う魚だい？」石山が訊いた。

「少し身が赤いのがメジナ、白いのはマゴチです。あと白身だけど少し色がついているのがフッコとクロダイ。今日の朝に水揚げされたものばかりですよ」と私が答えた。

「やはり、海の近くはいいねえ。俺は内陸で育ったから、魚と言えばサンマかサケばかり食べていたような気がするよ。コイやハヤもご馳走だったんだ」弘道も嬉しそうだった。

「それにしても、あの山中って野郎は嫌な奴だね。毎日顔を見るたびに吐き気を覚える」仁藤が話題を変えた。

「自分はまるで無能なのに、正社員というだけで威張っていやがる。何度張り倒してやろうと思ったかわからん」柳田が続いた。

「何でもかんでも、俺たち臨時職員が悪いと決めつけるんだ。そうやって怒鳴って回るの

が仕事だと勘違いしている。その点では、重森さんは信頼できるな。あの人がいなかったら、とうにあの職場も辞めていただろうな」石山も顔を紅潮させながら言った。

「休憩室で耳にしたのだが、山中たちは俺たちやほかの職員に点数を付けて、誰が最低なのか、賭けをしていたんだぜ。仕事に文句を言ったり失敗したりしたら二点、さぼったら四点、施設を壊したら六点、辞めたら十点、自殺したら二十点だとさ。それで、あいつらの採点では佐川が断トツで一位、今村が二位、そして三位は玉川だった」

柳田が言ったことに、私は驚きを隠せなかった。「どうして私が二位なのですか？」

「文句が多く、正社員の悪口を言っているという評価だった。いずれ辞めそうだと言う者もいた」

「悪口を言った覚えはありませんよ」

「忘年会のこともあるしなあ。俺たちどうして話していることを、告げ口する奴がいるかもしれないな。ひどい話だ」柳田は不快そうに言った。

「山中って、会社で失敗ばかりしかして、落ちこぼれていたらしいですよ。それを小村さんが救ってやって、今の現場監督になれたのだから」私は悠美から聞いた情報を暴露した。

「まあ、失敗しても挫けずにがんばっているということか。そういうところは見習うべきかもしれないな」柳田が今度は佐川に向かって言った。

「おまえがさぼるから、われわれ臨時職員の評価が落ちてしまうんだ。少しは反省したらどうなんだ」さらに弘道が責め立てた。

佐川は、面倒くさいことを言うなあ、といった表情で口を開いた。

「ゴマスリ野郎にそんなことを言われる筋合いはない」

「何だと！」弘道は今にも佐川を殴りつけそうだった。

「あんたたちは、私がさぼっていて、そのしわ寄せを被っている、と思っているのだろう。しかし、あの会社で私たちは期待されているわけではない。頑張ったからといって、給料が上がるわけでも雇用が延長されるわけでもない。私がしらべたところ、あの会社はこの数年、高卒か中卒の新人しか正規に採用していない。県の事業で雇われた臨時職員が正社員になった例はないんだ」

「薪をたくさんつくれば儲けになるだろうし、ゴミの分別も意味があるだろうが」石山が声を荒げて言った。

「薪はつくりすぎて山積みになったままだ。ベルトコンベアーも雪かきばかりで意味がな

い。今の時期は停止させておけばいいんだ」

「それでは俺たちがする仕事がなくなってしまう」柳田が言い返した。

「だから、さぼりながら適当に働いていけばいいんだよ。仕事がなくなれば、予定より早く解雇されるかもしれない。だいたい、山中や玉川みたいな、ろくに教養もない馬鹿者の言うとおりにコツコツ働くなんて馬鹿らしい」

なるほど佐川の言うことにも一理ある、と私は思った。しかし、その言い方が気に食わなかった。ほかの者たちも不快感を表情に出していた。

「さあ、お鍋ですよ。いっぱい食べてくださいよ」仁藤が大きな鍋を運んできた。味噌ベースの鍋の中には、様々な魚介類が野菜とともに煮込まれていた。やがて日本酒をコップでがぶ飲みする者やカラオケをする者も出てきて、宴会は盛り上がりつついった。

歌い終わった石山が私のところにやってきて、酒を注いだ。

「おい、兄ちゃん、働けるのは今のうちだけだぞ。仕事を選んだりしたらいかん。がんがんで働いて金をためるんだ。いっしょに福島に行かないか？」

「放射能の残るところで働きたいとは思いませんよ」

「給料を二倍以上もらえるんだぞ。どうして行かないんだ。少しくらいの放射能を恐れてどうするんだ。安全基準というものがあるから大丈夫なんだ。そういう根性だから、おまえはだめなんだ」

ああ、またか、と私は思った。この類の宴会をやると、酔いにまかせて好き放題言うてくる奴が必ず出てくる。自分は正しくて他人はだめだというパターンだ。それを断ると、付き合いが悪いとか、性格が悪いとか言いふらす。

「こいつはキリギリスみたいに遊んで暮らして、いざと言うときには、誰かに泣きつくんだ。でも誰も助けてくれなくて、野たれ死にするんだろう」と言ったのは佐川だった。

私はかっとなって佐川に怒鳴った。「おまえこそ、もう終わりだ。おまえが変人だということでは会社中に知れ渡っている。すぐにさぼる奴だという噂は、じきにこの地域全体に広まるだろう。次の仕事なんか見つからない」

「おまえも福島のがれき処理に行ったらどうだ。今からでも間に合うぞ」石山が今度は佐川に言った。「年をとれば仕事はますますなくなっていく。工場は次々に中国や東南アジアに移転している。若い者は減る一方だから、国内の商売も下火になる一方だ。われわれ臨時職員が次に働き場所を見つけるのは至難の業だ。贅沢は言っていられないんだ。それに、がれき処理は社会に大いに貢献する、やりがいのある仕事だ」

カラオケで盛り上がった宴会が気まずい雰囲気になってしまった。

「まあまあ、むずかしい話はやめましょう。どんどん飲んでくださいな」と言ったのは仁藤だった。ここで、柳田がメジナの煮付けを運んできた。この時期のメジナは脂が乗り、臭みも消えて美味だった。同じ魚でも、時期によって美味くなったり不味くなったりする。我々の仕事もそのように波があるものだ、と私は思った。何だかんだと言っても、今は全員働いていて給料をもらっている。しかし、二ヶ月もすれば、皆、仕事を失ってしまう。

佐川に与えられる仕事も変わっていった。他の臨時職員や正社員と共同で作業をすると、ペースが合わず、仕事ははかどらなかつた。誰かに何か言われると、佐川は感情的に乱れ、そのうちふいにいなくなってしまう。一方、佐川一人に一つの仕事を任せると、案外うまくいくことがあった。たとえば、ドブ掃除をしたり、廃棄されたパソコンを分解して希少メタルを取り出したりする仕事を、佐川は休まずにコツコツと続けた。

そんな日々があつという間に過ぎ去り、二月の末になって、佐川は誰に挨拶することもなく消えていった。そして、私たち他の臨時職員も三月の終わりに、この廃棄物処理場を退職した。弘道にも私にも柳田にも、雇用延長の話は来なかつた。

4 不安定な日々

新しい年度になると、新規の正社員や給料のよい臨時職員が募集されるものだ。ところが、この年にはまともな仕事は見つからなかつた。まだまだ景気は悪いな、と私は思った。公共事業に関係した仕事は六月にならないと募集されない。仮に募集されたとしても、年度初めは応募者が多いので、競争して勝つ可能性は小さい。

新聞では、この地域でもっとも大きな工場が閉鎖されることが報じられていた。正規の職員は他の工場へ異動できるが、臨時職員のうち二百人が職を失うらしい。電器関係の企業だった。中国や韓国との価格競争に負けて、赤字が膨らんでいるらしい。ハローワークはますます混み合うことになるだろう。

家の近くを流れる川では、茶色く濁った雪解け水が怒涛の流れとなっていた。この流れでは、遡上したてのアユやサクラマスは苦勞するだろう。うかうかしていると、濁流に飲まれて死んでしまうかもしれない。自分も似たようなものだが、魚よりは考える時間がある。溺れるのは嫌だが、ただ泳ぐだけではつまらない。とりあえずは、仕事を探しつつ、春の野山や水辺を楽しみたい。それは甘い考えだろうか？

そんなときに、柳田から電話がかかり、新しい事業をしないか、と誘われた。柳田の家を事業所として、依頼された仕事に人材を派遣するのだという。仕事があったときだけ働いてもらい、その分だけ日当を出す仕組みらしい。柳田が声をかけて集まったのは、柳田の大工仲間の二人と、仁藤、佐川、私の五名だった。私は佐川がいることに驚いた。

柳田の発案により、会社の名前は『完璧能率作業』となった。パソコンで簡単な紹介パンフレットをつくった。格安ということアピールポイントに、できることを書き並べた。庭木の手入れやアウトドアのほかに生物調査も入れた。家政婦、ベビーシッター、ペットの散歩、野球の指導に、清掃作業や引越し作業も加えた。土木建築と廃棄物処理も入れたが、実際に話がきたときにできるかどうかはわからなかった。その後、柳田は市役所に行って、開業届けを出してきた。

次に、私と柳田は三月まで働いていた会社に行ってみた。暖かい季節になって、鳥のさえずりは少なくなっていた。冬の間、山から降りていた鳥たちは、餌を食べ、子を育てるために、山へ戻っていった。ただ、カラスとトビだけは、以前と変わらずに飛び回っていた。

事務所では小村と重森が対応してくれた。私たちは「完璧能率作業」のパンフレットを見せ、この事業の見通しについてアドバイスを求めた。小村の意見は、このへんでは住人の所得が低いから、お金を出して人に依頼するよりも、自分でやってしまうのではないか、というものだった。重森は、経費をかけずに様子を見ながら、いつでも止められるようにしたほうがよいと助言してくれ、さらにその道の成功者である志田を紹介すると約束してくれた。

その日の晩、悠美と居酒屋に行った。開店したばかりの綺麗な店で、新鮮な魚料理や地鶏などの肉料理が美味しかった。

「完璧能率作業ねえ。何だかぱっとしない名前だね。横文字にでもしたほうがいいと思う。それに、いかにもちっぽけな会社というイメージだから、信用されないかもしれない」

「柳田さんが決めたのだから、しょうがないよ。それに名前なんか、どうでもよいと思うよ」

「あまり小さな会社は、ちょっとしたこと躓いてしまいそう。声の大きな人の一言で道を誤ってしまうこともあるかもしれない。それに、どうして佐川なんか入れるのよ。ダメ人間だとわかっているのに」

「それも柳田さんが進めたことなんだ。こっちは、様子見で参加しているだけだから、い

つでも辞められるように、積極的なことは言わないようにしている」

「私は乗り気でない。何でも屋なんて、うまく行ってもたかが知れているから、あなたにはもつと夢がある大きなことをしてほしい。前からそう言っているのに、あなたは何も考えていない。私の言うことがわからないのかな？」

「夢のあることか。それは何かなあ、ゆっくり考えてみるよ。子供ではないから、実現できるかどうかも重要なな」

廃棄物処理場に毎日通っていた頃と比べて、悠美と会う機会は限られていた。そのために、私の中では、悠美に会いたい、悠美と話をしたいという気持ちが日ごとに増していた。しかし、実際に会ってみると、悠美にだけ何らかの変化が生じたように感じられた。悠美の表情から、私を否定的に見ているのではないか、という疑念が浮かんできた。時間ばかりが過ぎて、悠美との距離をかつてほど縮められないままに、私たちは居酒屋を後にした。

志田の事業所へ向かうには、いくつもの電車を乗りつがなければならなかった。その電車に柳田と向かい合わせに座りながら、窓の外をぼんやりと見ていた。どの家も小奇麗で明るい色をしていた。路地では子供たちが楽しそうに遊んでいた。

それにしても、会社の設立に関わるとは、自分でも驚きだった。一人で好き勝手に生きてきたのに、こうして柳田と二人で志田に会いに行き、貧しくても楽しかった生活を捨てようとしている。なぜだろうか？ 悠美との将来を考えたからだろうか？ それとも老後を心配したからだろうか？ 私にはよくわからなかった。ただ、臨時職員として短期間働いたことが、私に何らかの作用を及ぼしたことだけは確かであった。

駅からバスに乗って三十分ほど行ったところに、志田の事業所があった。川に近く、周囲に人家は少なかった。広い敷地には重機やトラックのほか、いくつもの倉庫があり、何人かの従業員が足早に動き回っていた。

志田は小太りで、高価なスーツを着て、柔らかなソファに座っているのではないかと想像していたが、実際は全くちがっていた。引き締まった体の上に作業服を着ており、整然とした机のまわりをせわしなく動き回っていた。髪の毛もふさふさとあり、若々しかった。電話が何度もかかってきたが、秘書はおらず、志田が手際よく対応していた。仕事有一段落すると、志田は満面の笑みをもって私たちに接してくれた。

「ようこそ、いらっしやい。重森さんから事情は聞いているよ」

「完璧能率作業の柳田です」と言つて柳田は名刺を差し出した。私もそれに続いた。

「ナンデモヤリーズの志田です」志田も名刺を渡してくれた。

「なかなか広い敷地ですね」

「ここは本部なので、たまにしか使わない機械や重機を置いているんだ。営業所は県内だけで八箇所ある。そこには、掃除、工作、草刈などの簡単な作業をするスタッフを置いているが、スズメバチやシロアリの駆除、クマやイノシシへの対策、庭木の剪定、塗装工事や解体工事など特殊な技能を必要とするスタッフは本部に置いている。営業所が増えるほど、全体の効率は上がり、儲けも増えていくんだよ。仕事が順調で毎日忙しいが、楽しくてしょうがない。充実感というやつだな」志田は自信に満ちていた。

「俺たちはまだ会社をつくったばかりで、仕事の仕方がよくわからないのです」柳田は正直に言った。

「始めから順調にはいかないだろうな。あのあたりでは、時間当たりの報酬もせいぜい二千円程度だろう。それでは儲からないな。技術を要する仕事だと時給は高くなるのだが、依頼数が少ないので、それだけではやっていけない。だから、うちのようにネットワークを広く張り、儲かる仕事を依頼されることが重要なんだ」

「特殊技能ですか」柳田がつぶやいた。

そのとき、作業服を着た初老の男が小走りで部屋に入ってきた。

「社長、織山建設の山郷課長が挨拶に来ています」その男は用件だけを言った。両手をもにもにびたりとつけ、直立不動の姿勢だった。

「わかった、待たしておけ」と志田は指示した。

「上司への態度は敬意を持たないといけない、というのがわが社の方針でね。それを姿勢で示すようにしているんだ。年齢は関係ない。勤務態度のよい者、仕事をする者はどんどん出世させ、だめなのは切っていく。組織の調和を乱す者は容赦なく解雇しなければいけない」

「そういうものですかね」私はぼそっとつぶやいた。

志田は鋭い目つきを私に向けて言った。「ところで、君は何ができるのかい。特殊技能は持っているのか？」

「私ですか、そうですね、釣りとかアウトドアは得意です。試験を受けて取得するような資格は持っていません」

「はっはっはっ、資格もなくて食っていくのは大変だな。釣りができても銭にはならないぞ。アウトドアの世界にはボランティアがいっぱいいるから、これもむずかしいな。でも

な、狙い目はある。一つは老人だ。老人はこれから増える一方だし、金を持っている。地元の金をもっている老人たちが何を求めているのかをしらべるんだ。それから、混んでいて繁忙状態にある仕事を見つけないことも重要だ。需要が多ければ、新しく参入しても仕事は回ってくる」

次に私は、「志田さんが働いていた頃って、あの会社はどんな感じだったのですか」と訊いてみた。

「あの頃ねえ。私も若かったから、初めはおもしろかったんだ。徐々に仕事が増えていったしね。でもね、少人数で長年同じことをしていると、いろいろ積もる思いがあるんだよ。不満や失望、失敗や挫折、差別やいじめ、そういうものが堆積していつて、ある時点で我慢がなくなってきたんだ。だから、私の会社では、社員の間にもそういうものが芽生えないように、いろいろ工夫をしている」

「工夫ってどんなことですか？」柳田が訊いた。

「どこの会社でもやっているだろうけど、定期的に配置転換をする。また社員のしたい仕事について、個別面談をして明らかにする。それから、ハラスメントがあれば、直接私に通報できる仕組みをつくってある。あとはレクリエーションだな。ボーリングやソフトボールの大会を開いたり、ピクニックに行ったりする。規律だけでなく、遊ぶことも大事なんだよ。あとはねえ、宴会は時間制限の外食店でやるんだ。さもないと酔ってトラブルを起こす奴が出てくるからな。とことん飲みたい奴は、少人数で二次会に行けばよい。女子社員に襲いかかったり、酔って上司批判をしたりしたら迷惑だからな」

「あの会社ではレクリエーションは、ほとんどありませんでした」と私は言った。

「小村や重森にはそこまで頭が回らんのだよ。小村はあとから会社に入ったくせに、自分は管理者だという顔をして、偉そうにしゃがった。それもうっとうしくて、俺はあの会社を辞めたんだ。その後、会社は行き詰まってしまったが、社長が議員や地元の有力者、官公庁とのパイプをつくって、持ち直していった。環境保全が評価されるようになっていった時代だったから、成長する基盤はあったんだな。人脈は大事だよ、君たちには何もないだろうけどな。そもそも、釣りばかりしているようでは駄目だな」

その言葉に嫌味を感じたためか、柳田は「そろそろ、この辺で失礼します」と言った。

「最後にアドバイスをやろう。柳田君は何か疲れているように見える。オーラがないんだ。それでは、社長として部下を引きつけられないし、会社の信用も上がらない。今村君は反抗的な感じが顔全体に漂っていて、見ている者を不快にさせる。商売をするならば、自分

が何を考えているのかを見抜かれないように振舞いなさい。私のようにガンガン喋って煙に巻くのも一つの方法だ。何も話さないのもよいかもしれない。好きな相手にも嫌いな相手にも、同じように接することが必要だ」そう言って志田は私たちを見送った。

私たちは志田の言ったことを反芻しながら帰途に着いた。帰り際に駅の近くでラーメンを食べた。豚骨の香りがしつかりとした濃厚なラーメンだった。自分たちの町にある味の薄いラーメンとは、格段の差を感じた。一方で、八百円もするラーメンは田舎で売れるだろうかと思った。コストが安くて薄味のラーメンを五百円で売ったほうが儲かるのではないか。

五月の終わり頃になって、ようやく一件の依頼があった。環境生態系調査研究所という会社からの下請けで、農業水路の魚類調査をしないか、というものだった。資料の公表を研究所が行うことが条件で、一人当たり時給千二百円だという。安いと私は思ったが、ほかに仕事はなかったし、八日分くらいの給料をもらえそうだった。

柳田は早速メンバーに参加を打診したが、集まったのは柳田、仁藤、佐川と私の四名だけだった。私はタモ網を持っていたので、魚捕り用に提供した。ほかに投網と追い込み網、ウエーダー、サンプル瓶を研究所から提供され、どのような場所でのくらい調査するかを示す計画書も届いた。農業水路の管理組合と市の農政課には研究所から連絡してもらった。

調査では私がリーダーとなった。何しろ、他のメンバーは魚の名前すら知らず、魚を捕る方法もわからなかった。水路といっても、コンクリートの水路もあれば、土のままの水路もあった。調査では、一人が追い込み網を持って待ち構えるところに、他のメンバーがたも網を使って魚を追い込む方法を採用した。初めは佐川が追い込み網を持つ役目だった。ところが、佐川は魚が水面近くに見えると、自分でそれを捕らえようと網を浮かせてしまい、結局何も捕れないということが続いた。そのために、追い込み網を持つ役目は仁藤に代わってもらった。広い水路では投網を投げたが、投網を打つことができたのは私だけだった。

その後、十箇所ほど環境の異なる水路で同様の調査を行い、どんな場所で魚が多いのかわかってきた。コンクリートで囲まれた水路では、魚はほとんど捕れなかった。ただし、流れが緩やかで底に泥が堆積していると、ドジョウがけっこう捕れた。魚が多かったのは、岸が土堀のまま、えぐれている場所だった。水草が繁茂していると、なおさら魚が多く、

稚魚の割合が高かった。

二日目になると、私たちは魚捕りにも慣れて、順調に調査をこなしていった。昼休みには土手の上に並んで、皆で弁当を食べた。柳田と仁藤は家で作った弁当を持ってきた。私と佐川は前日の夕方にスーパーで買ってきた弁当を食べていた。示し合わせたわけではなかったが、どちらも二五〇円に値引きされた焼肉弁当だった。

「おまえら、何か似ているなあ。性格や言うことはちがうけれど、根本が似ているような気がする」と柳田が言った。

「私もそう思う。働くことより遊ぶことを考えている。趣味を大事に暮らすのは、それはそれで立派なものだ」仁藤も同意した。

「私はそうかもしれませんが、佐川さんはどうでしょうね。趣味といっても、ちよつとやってみたという程度ではないでしょうか」

「そんなこと、おまえにわかるのか。人に話して自慢するような真似は好きでないんだ。放っておいてくれ」佐川は私が言ったことに、強い口調で反発した。

「私は自慢などしたことはない。登山や釣りの話をあなたにしたって、理解できないだろう。でもね、自然についての専門的な知識はいつか何かの役に立つものなんだ。淡水魚の見分け方だって、こうして仕事になっている。あなたには役に立てることがあるのか？」

私は調査での佐川の態度に腹を立てていたので、さらに激しい口調で言い返した。

佐川はそれ以上何も言わなかった。田植えの終わった水田では、まだ細い稲が風になびいていた。水路のまわりではユスリカが群れ、上空ではヒバリが空を舞っていた。

確定したデータをエクセルで表にする作業は佐川に任せた。ほんとうにできるのか不安だったが、できた書類に間違いはなく、この点では佐川も役に立った。実際、得意なことには人によってちがう。こいつはよくて、こいつはだめだと、簡単に決めつけるのはよくないのかもしれない。佐川は経理についても管理するようになり、柳田と二人で会社を仕切るようになっていった。

その後、もっとも活躍したのは仁藤だった。子守、掃除、引越しの手伝いなど、家政婦のような仕事が多かった。ほかにぼろ屋の解体作業が一件あり、これは私たち四人に、柳田の大工仲間も加わって請け負った。こうした解体作業は大手の業者の仕事でもあるのだが、私たちは重機なしでも解体できるぼろ家に限って、大手よりも安い値段で引き受けた。とにかく安いという評判を広めることが必要だった。

いつしか季節は夏に入ろうとしていた。私たちは夏に儲かるのは何だろうか、と思索した。そして思いついたのは草刈だった。

夏の雑草はいくら刈っても伸びてくる。顧客が見つかれば、何度でも仕事をもらえるだろう。私と佐川は官公庁や主な会社に電話をかけてみた。そしてわかったのは、このビジネスにはすでに様々なライバルが入り込んでいるということだった。

草刈専門の業者もいれば、低料金で仕事を請け負うシルバー人材センターがあった。その作業を見に行ったところ、草刈に熟練した老人たちが手際よく仕事を進めていた。刈った跡が美しかった。とても太刀打ちできないと思った。私たちはもっと小さな、ほかの業者が手を出さない仕事を見つけてはならない。

私は柳田と佐川を誘って、登山やハイキングで賑わう山へ行ってみた。自然ガイドのような仕事はできないか、と思ったのだ。訪れたのは、頂上近くに神社があり、訪れると長寿の望みがかなうと評判の山だった。春には桜、秋には紅葉が美しく、その頃には大勢の人々が賑わう。一帯が自然公園になっており、野鳥の観察や散策に訪れる人も多い。

しかし、そこで活躍していたのは自然観察インストラクターと言われるボランティアであり、野鳥や昆虫に精通しているので、太刀打ちできそうになかった。ほかに、学生たちがゴミ拾いをしていたが、これもボランティアだった。大学によっては、このような活動を社会貢献とか地域活動と称して必修科目にしているところもあり、学生が就職するときに有利になることがあるらしい。

私たちは開けた芝生の上に座って考え込んだ。

「ボランティアもシルバーもない、儲かる仕事なんかあるのかな」と私が呟くと、佐川が「そういう言い方はないだろう」と突っかかってきた。「仕事がなかったら食っていけないだろう。もっと真剣に考えろよ」

「あなたにそういう言い方をされる筋合いはない」と反発すると、さらに佐川は私を攻撃した。「親の家に住んでふらふら生きている」、「貯金もなく将来年金ももらえない」、「一生結婚できない」などと、言いたい放題だった。魚類調査のときに攻撃されたので、その仕返しのもりだったのかもしれない。それに対して私が、「それがどうした。収入がない点ではおまえも同じではないか」と言うと、佐川はまた黙ってしまった。

5 砂浜へ向かう

翌日、私は久しぶりに悠美に会い、「会社はどんな感じ？」と訊いた。

「役に立たないと言っていたけれど、大勢の非正規職員がいなくなったので、プラント処理のほうは忙しいみたい。それでも玉川は解雇されるかもしれない。あまりに役立たずだから仕方がないな。間伐材や家屋の解体は増える見込みだから、人は多いほうがいい。正社員を増やす余裕はないから、また県の予算がつかいたら、非正規を募集するかもしれない」

「その非正規という言い方、やめてくれないか。非国民とか非常とか、非のつく言葉を聞く気分が悪くなる。馬鹿にされているような気がするんだ」

「政府も使っている正式な言葉なのよ。嫌だと言うなら使わないけれど、小さなことにこだわるとね」

「次にまた応募するかどうかは、今の会社しだいだな。どれだけ仕事があるのか、いくら給料をもらえるのか、何もわからないんだ」

「その会社、あまりに頼りなくて見てもらえない。別のことをしたら？」

「そう決めつけるものではないだろう。小さな会社から出発して、大会社になることもあるんだよ」

「私はね、あなたがいつか何かやってくれるような気がしていたの。だから、私の会社の出来損ないみたいなどころで手伝いをしているだけのあなたには、がっかりなのよ」

「……………」

「もつと前からやりたかった仕事はないの？」

「……………きのう、あの佐川に、いいかげんな暮らしをしていると批判されたんだ。親が残した家に住んでいて、将来が見えない奴だと」

「それはいくらか当たっているわね。でも、そんなことを気にする必要はないと思う。目先のお金が必要だからと安易に仕事をしていたら、それこそその先には何もありません。働くだけで終わってしまう。そうではなくて、利用できるものはすべて利用して次のステップに向けて準備をすればいいのよ。恥じることもない」

「明日は明日の風が吹くというのも、おもしろいと思わないかい？ 職業や住所を転々としても、そのときにやりたいことができるんだ。貧しくてもいいじゃないか。エキサイティングなことに挑戦するんだ。お金なんか必要なときに必要なだけ稼げばいい」

「若いうちなら、それでもいいかもしれないわね。でも、もう若くないのだから、病気をしたり、事故に遭ったりするときのことも考えておくべきよ。年金も貯金もあって当たり前なのよ」

「……………」

「そのうえで大きく飛躍する道を考えて欲しい。あなたにはそれができると思っていたから言っているのよ」

「そう厳しいことばかり言うなよ。俺だって今の会社を成功させて、次のステップに行くつもりなんだよ」

悠美は少し苛立っているように感じられた。私たちは海辺のレストランで食事をした。マダイの煮付けは卵もついていて美味だった。刺身はアジとヒラメだった。どちらも天然もので新鮮だった。冬の間荒れていた海も今は穏やかで、白波が立っていないかった。漁船も順調に出漁して、魚を獲っているようだった。

「これからどうする？」

「……」

「ホテル行こうか？」

悠美は小さく首を横にふった。

「何かそういう気分じゃないの」

私はそれ以上何も言わなかった。食事の後で、テラスに出て二人でソフトクリームを食べた。海藻入りのソフトクリームということだったが、どれが海藻の味なのか、よくわからなかった。ただ、白いソフトクリームの中に、紺色の小さな粒がいくつか混じっていた。

私は残ったコーンを小さくちぎって、テラスの上のいた数羽のウミネコに向かって放ってみた。またたく間に、次から次へとウミネコが集まってきた。ウミネコはミヤーとかギヤーとか鳴きながら、互いにつき合っていた。やがて、つき合いに勝利した三羽が私の目の前の位置を占め、私が次のコーンを放るのを待っていた。

私は、コーンのかけらを三個ほど、そのウミネコたちに投げてみた。すると、優位な三羽だけでなく、コーンめがけて飛びこんできた十羽ほどのウミネコが入り乱れて、コーンを取り合った。浅ましいものだなと私は呟き、悠美も頷いた。よほど腹が減っているのだろう、それは戦場だった。

ところが、ふと横のほうを見ると、争いには加わらずに私をじつと見つめるウミネコがいた。そこにはコーンは投げていない。私は思わず、そのウミネコにコーンのかけらを、それまでの、どのかけらよりも大きなコーンのかけらを放ってやった。ウミネコはそのかけらをくわえると、あっという間に飛び去っていった。それを見て悠美は笑った。

その後も、仕事はほとんどなかった。私の貯金はわずかとなり、野菜と米のほか、魚は

自分で釣ってきた。港では小アジをサビキ仕掛けで狙う人が多かった。サビキでアジを釣るためには、集魚剤でおびき寄せる必要があったが、それを買う金がなかったので、ほかの釣り人の間にまぎれて釣った。寄生虫のようなものだった。

アジ釣りはつまらなかったで、スズキを狙うこともあった。誰もいない夜の海で目に映るのは、遠くの町の灯と、ときおりあらわれる飛行機のライトだけだった。風力発電の翼の回転音が波音に紛れている。私は沖のテトラポットに向けてルアーを投げた。魚の形をしたミノーというルアーだ。細いラインを使うと遠投できる。ただし、先端部分だけは太いラインを用い、スズキの歯やエラが当たっても切れにくいようにした。波が静かなときは、音のしない小さめのミノーを用い、波のあるときには少し沈む大き目のミノーを使った。体長が八十センチを超えるような大物が釣れると、その後しばらくは食べていた。

一週間ぶりに事務所に行ってみると、柳田と佐川が深刻な顔をして話し合っていた。仕事が増える兆しがなく、柳田の木工仲間にはもう一切関わらないと通告されたという。仁藤は、固定客ができたようで、会社から抜けて一人でやっていくという。これでは、この会社を続けて行けそうにない。結局、柳田は志田に相談することにした。

その後起こったことは私にはあまり望ましいものではなかった。柳田から聞いた話では、志田はこの会社の構成やこれまでの依頼、宣伝方法などをくわしく尋ねた後、この会社をナンデモヤリーの支店とすることを提案した。必要な資金を出すという。これに柳田と佐川が賛同し、じきに志田が新しい所長を派遣してきた。

その社長は高城雄太という名前のまだ三十台前半の男だった。彼は社員を募集して、新たに高卒の若い従業員を五名雇った。事務所は街のはずれの古いビルの一階に設置された。柳田は経営を一切、高城に任せ、何も口を出さなかった。若い社員は神奈川の本部に研修に行き、それぞれの技能を見につけてきた。佐川はマネージメント研修を受けてきたらしい。

柳田は木工関係の仕事ができたときだけの臨時従業員となり、普段は出勤しないことになった。責任がなくなつて嬉しそうだった。私はたまに事務所を訪れては、様子を伺っていた。高城からは、正式に社員として契約するかどうか早く決めるように、と言われていた。

研修から戻ってきた佐川には「副所長兼推進本部長」というポストが与えられた。佐川はさぼることもなく、社員の仕事の割り振りを淡々と行い、むずかしい問題については高

城の指示をもらいにいった。社員どうしが無駄話をしていると、その間にボールペンを投げつけた。若い社員が陰で携帯ゲームなどを行っている、呼びつけて説教した。怒るでもなく笑うでもなく、ただ何十分の間、その社員に組織とはどういうものか、働くとはどういうことかを説き続けた。そのしつこさに、若い社員たちも従っていった。

仕事の依頼は増えているようだった。潤沢な資金を使って広告を出したことが効果をもたらしたのだろう。全国展開をしている会社の支店ということも、信頼された原因かもしれない。高城は探偵の技術を持っており、浮気調査や人捜しの仕事も増えていった。ネットオークションを利用してものを売る仕事も加わった。ビルやマンションの管理や補修の仕事も請け負うようになった。わからないことは本部に問い合わせればよい、というのも大きな強みだった。さらに、「老人お助け隊」という名称で、一人きりの老人のために買い物をしたり、話し相手になったりする事業を始め、これが人気となった。若い社員は「おじいちゃん」、「おばあちゃん」と甘えた声で「孫」を演じ、同じ客から繰り返し呼び出されるようになっていった。

やがて中年の新規従業員がやってきた。それは廃棄物処理場にいた玉川だった。玉川の雇用を決めたのは高城であり、佐川が研修に行っている間のことだった。高城は玉川がどのような人間なのかを知らなかったにちがいない。廃棄物処理場で正社員として勤務していたので、経験もあり有能だと判断したのだろう。

玉川について、佐川は何も言わなかった。佐川と玉川は言葉を交わすことも少なく、静かに働いていた。玉川は私にも親しい態度を見せなかった。

梅雨本番となり、毎日雨がしとしと降っていた。私はとりあえず働いてみることにした。始業時間の少し前に事務所に行くと、従業員服を与えられた。それを着て待っていると、所長の高城がやってきた。ほかの従業員たちは一列に整列して、所長の訓示を待っていた。私もそれに従った。

まず始めに佐川が帽子をとり、「おはようございます」と所長に敬礼し、ほかの従業員もそれに習った。高城は「おはよう」と言い、次に佐川が全員を点呼した。

「本日は九番の今村博も来ています」と佐川が言った。

「よろしい。よい成績を収められるように今日も元気にがんばろう」と言って高城は所長室に戻って行った。従業員たちは、今日の仕事の割り振り表をパソコン上で確認し、それぞれの仕事に向かっていった。何もない者はちらしを持って、町に出て行った。

私の初めの仕事は、佐川の補助をすることだった。翌日からの仕事の割り振りをエクセ

ルに入力し、それを佐川と高城に見せては訂正するのが日課となった。佐川は私の入力ミスを見つけては、「しょうがないなあ、また間違っている」と嗤った。わざと小さく汚い手で下書きをつくっているのではないかと疑った。

私は頭に来たので、佐川の机の横にたまったゴミを指して言った。

「こんなに紙くずをためていると、誰かに放火されたら大変ですよ。綺麗に片付けたらどうですか？」

佐川は一瞬私を睨んだだけで、何も言い返さなかったが、押し付けてくる仕事は多くなくなり、ミスの指摘もきつくなかった。

私は玉川にも言ってみよう。「佐川は火付け人だ。気をつけたほうがいい」

それに対して玉川は「聞かなかったことにしてください。面倒なことに巻き込まれるのは御免です」と言い、それきり私と話をしなくなった。

高城は、私の態度がほかの従業員に比べて規律に欠けると指摘した。

「あなたの履歴書を見せてもらいましたが、どの勤めも長続きしていない。渡り鳥のように、あっちこっちに移動して、短期間しか働いたことがない。渡り鳥ならば、季節に応じた棲み場所を変えるので適応的だが、あなたはどこにも適応できなかったように見える。会社としては、あなたのような人を雇用するのは危険なのです。うちでは能力第一ですから、とりあえず試していますが、やる気が感じられません。しっかり働いて業績を上げてもらわないと辞めてもらいます」

私はとりあえず「申し訳ありません」と謝罪した。ほかの若い従業員たちは、私や玉川とはほとんど話をせず、自分たちのグループをつくっていた。彼らが少し離れた場所で笑っている、私は馬鹿にされているのではないかと勘ぐった。

高城は夜八時をすぎないと帰宅しなかった。そのために、仕事の有無にかかわらず、佐川も他の従業員も八時までは事務所にいた。所長より先に帰宅することは暗黙の了解としてできなかったもので、私も同様に残業した。

いつしか私は若い従業員から「にーちゃん」と呼ばれるようになった。年上だからそう呼ばれるのだと思っていたら、彼らのこそこそ話から、私がニートだったから「にーちゃん」なのだと思いが付いた。私はもはやニートと言われる年ではなかったが、ニート崩れという言い方なら正しいかもしれない。

あるとき、佐川から新しい仕事のアイデアを出すように命令された。私はあれやこれやと考えてみたが、アウトドアについてのものしか思いつかなかった。

一つ目の案は、川や池で捕れる小動物をネットオークションで売って儲けるというものだった。すでにネットオークションでは、川エビ、小魚、昆虫などが高値で取引されていた。コストがほとんどかからないので、売れた分だけ収入となる。しかし、佐川は、「お前が遊びたいだけだろう。検討するに値しない」と却下した。

次に私は、海や川で釣り人から魚、イカ、タコなどを買い、それを旅館や居酒屋などに直接売ってはどうかと提案した。魚ならばサクラマスやメバルの価格が市場では高く、アオリイカやマダコも高額で取引されていた。釣り人の大半は食べることも釣りることに興味があるので、売ってくれると考えたのだ。しかし、この案についても佐川は、「釣り好きが思いつきそうな安易な考えだ。いったいどれだけの魚が集まり、どれだけ売れる見込みがあるんだ。とても実現できるとは思えない」と跳ねつけた。

それでも私は三つ目の案を提案した。それはアウトドア・アドバイザーというもので、山や野や川や海でアウトドア・ライフを楽しみたい人のために、アドバイスを与えながらガイドをするというものだった。ただ釣りやバードウォッチングを教えるのではなく、数日以上キャンプをしながら、さまざまな活動をとにもするのである。海では魚を釣るだけでなく、シーカヤックを楽しんだり、海岸で珪化木を探したり、カニを捕まえたりする。カニが入手できれば、それを餌にタコを捕る。山に登るならば、その途中でイワナを釣り、山菜を採る。川では泳いだり、滝に飛び込んだり、カヌーを楽しんだりする。アウトドアで獲れたものは、バーベキューにして自分たちで食べる。それぞれの活動のインストラクターならいるだろうが、多様な活動を複合させて楽しむのは、新しい試みではないかと思っただ。

しかし、これについても、佐川には鼻で嗤われた。「そういう趣味のようなことはまず頭から取り除け。そこにこだわっているから、まともな提案ができないんだ。だいたい、おまえは職場をなんだと思っているんだ？ 遊ぶ場所ではないんだ。嫌なことをするのが仕事というものだ。なあ、そうだろう」と言っ、佐川はまわりの従業員たちに同意を求め、彼らは一斉に頷いた。

佐川こそ職場で遊んでいたではないか、一方で志田は仕事が楽しいと言っていた、と思っただ、言い返すことはできなかった。

そんなある日、事務所に志田がやってきた。高城や佐川も驚いたので、抜き打ち検査のようなものだったのだろう。

志田は所長室で高城としばらく話をした後で、社員を集めて訓示を行った。入社したて

の頃には何もできなかった若者が残業を重ね休日返上で働いた結果、多くの業績を重ね、所長にまで出世したという話だった。そして、その所長こそが高城だと言う。君たちも高城所長を見習って、死に物狂いで働くように、というような話だった。

志田にはカリスマ性がある。引き締まった顔立ち、鋭い眼光、大きくて力強い掌、そうしたものの全体から人を惹きつけ、従わせる力が感じられた。佐川や玉川からは微塵も感じられないものだった。

私は志田には気づかれまい、と思っていた。一度、志田の事務所を訪れたとはいえ、短い時間であったし、柳田といっしょだった。私の顔など憶えていないだろう。ところが、志田は訓示の後で私のところへ歩み寄ってきた。

「また会ったな」

「お世話になってます」

「君はこの会社でどう働くつもりだ。アウトドアなんて仕事はないぞ」

「釣りや登山の仕事はなくとも、野外での仕事は多いと思います。体力には自信がありません。そういった仕事で私の力を発揮したいと思います」

「おまえは何もわかっていないな。おまえが力を発揮しようがしまいが、そんなことはどうでもよいのだ。そうではなくて、どういう点でおまえはこの会社に貢献できるのか、それを言わないといけない。会社が何を望んでおり、それに対しておまえがどう応えられるのか、それが重要なんだ。応えられなければ、おまえは失格の烙印を押されるだけだ。だから甘ったれた気持ちで取り組んではだめだ」

私は何も言えなかった。机の向こうでは、佐川や玉川が聞き耳を立てていた。彼らはすでにこの会社の部品となり、部品としていかに会社に貢献できるのかを考えていたのだろう。そして、そのために社長の意図をわずかのかけらでも聞き逃すまい、と構えていた。

志田は、そのことを知ったうえで、私に話しかけたのかもしれない。

私は何かいたたまれない気分になった。志田の言いたいことはわかったが、志田の言うとおりに会社のために尽くそうという気持ちにはなれなかった。高城や佐川を上司としてみとめるのも嫌だった。このまま会社の命じるままに働いても、失望が増すばかりだ。

翌日、佐川は私に海岸沿いの集落にチラシを配ってくるように指示した。私は黙って集落へ向かったが、途中で車を降り、チラシをゴミ箱に捨てて、海沿いの遊歩道を走り出した。風はなく、海も穏やかだった。

やがて私は河口近くの砂浜にいた。その右岸には砂浜に続いて草原が広がっており、ヒ

バリがさえずっていた。その草原に横になって海を見ると、一羽のウミネコがゆったりと空を舞っていた。そして、去年ここでゴミ拾いをしたことを思い出した。

こうしてチラシも配らずにさぼっている私は、あの頃の佐川と同じだ、と気がついた。私はにーちゃんと呼ばれ、他の従業員の嘲笑の的になっている。それは悠美が言っていたことから考えると、欲求不満のはけ口であり、やがて私はスケープゴートとして切り捨てられるのかもしれない。

これから事務所に戻って、辞めることを伝えよう。そのことを悠美はどう思うだろうか？ 仕事を続けられない馬鹿者だと軽蔑するだろうか？ しかし、悠美は今の仕事には批判的だったから、辞めることに賛成してくれるかもしれない。あるいは、どちらの選択をしても、私はすでに嫌われているのかもしれない。

いつの間にか私は眠ってしまったが、雲の間から差し込んだ陽光の熱を感じて眼を覚ました。時計を見ると、一時間も経っていなかった。むずかしい宿題を前にして寝てしまう子供のようなものだった。夢を見ることはなく、無意識の中に、自分の将来が暗示されたわけでもなかった。

カラスがカーカーと鳴く声があたりに響いた。波打ち際を水面ぎりぎりに飛びながら、餌を探しているようだった。私は背中についたゴミを払い落とし、大きく背伸びした。あのカラスは廃棄物処理場を見たカラスだろうか？ それとも暴風が吹き付ける砂浜で何かを漁っていたカラスだろうか？ そんなことを考えていたら、少し楽しい気分になった。空を飛んでいたウミネコは、いまは波の上を漂っていた。ウミネコは群れていると思ったが、このウミネコはひとりが好きなようだ。

よく考えてみれば、もともと無職だったのだから、会社を辞めても元に戻るだけだ。私に合った仕事をじっくりと考えてみよう。激しい運動や危険な体験によって鍛え上げた私の肉体は、いつか何かの役に立つだろう。

私は平たい石を一つ、海に向かって力をこめて投げてみた。その石はカラスの上空を飛行してから着水し、さらに沖を漂うウミネコめがけて、何回も波の上を跳ねていった。